

大学ボランティアセンターの役割とは

—関西地区大学の事例研究から読み解く—

2011年11月

関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会
(事務局: 社会福祉法人 大阪ボランティア協会)

この冊子は、大阪府福祉基金からの助成を受けて作成しました。

はじめに

阪神・淡路大震災などの大規模災害時に、若者が積極的にボランティア活動に参加したことの意義や大学改革の要請を背景として、2000 年以降、本格的に日本の大学においてボランティアセンターの設置が進んだ。現在、その数は、117 カ所にのぼっている（2011 年 9 月現在、ユースビジョン調べ）。

それにしても、大学ボランティアセンターの運営は、本当にむずかしい。なぜなら、ステークホルダー（利害関係者）が多岐にわたっているからである。なかでも、大学という組織内でのステークホルダー同士の関係がややこしい。すなわち、「学生」（ボランティアセンター運営に関わる学生とそれ以外、センターに関わる学生の中でも学部等の違いもある）のみならず、「教員」（ボランティアセンター運営に関わる教員とそれ以外、またセンターに関わる教員の中でも研究分野やボランティア観の違いもある）、「職員」（大学全体の意思決定に関わる部門とボランティアセンターの担当者、またセンター内でも事務職とコーディネーターという違いもある）、という 3 者それぞれの調整が必要となる。これらに加えて、当然のことながら学外の地域団体や NPO 等との連携・協働も必須である。

したがって、大学ボランティアセンターに勤務するボランティアコーディネーターのみなさんの悩みは大きい。新任の方からは、何か手がかりになるものがほしい、マニュアルがほしい、という声もよく聞く。とはいうものの、大学ボランティアセンターは、その設立経緯や趣旨、運営形態、活動内容が大学ごとに大きく異なっているため、一律のマニュアルを作ってもそれほど有効に機能するとは思えない。

ただ、何か「核となる考え方」はあるはずである。学生や地域団体からの相談への対応の仕方、どのように活動プログラムを開発するか、学生スタッフへの関わり方などに、ボランティアコーディネーターとして、共通の視点（価値観）があるはずである。それを基盤に、各々の大学の事情や背景に応じて、より適切な判断や動き方ができるようになれば…と思う。

そのために、今回、「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」の皆さんが地道に積み重ねてこられた「事例検討」は、大変大きな意味を持っている。自らの実践事例を持ちより、その視点やスキル、課題を確認しあうという作業は、きわめて重要だ。様々な事例に学びながら、一人ひとりが「応用力」を身につけていくこと、それが大学ボランティアセンターの質の向上につながっていく。さらに、本報告書のように、それらをまとめて発信していくという努力が、大学ボランティアセンターやコーディネーターの社会的認知と理解を深めていくことになると思われる。

日々の業務で忙しい中、このような“まとめる”作業をしてこられた皆さんに、敬意を表したい。そして、こうした地道な取り組みを通して、大学ボランティアセンターの学内外における評価が高まっていくことを期待したい。

2011年 11月

筒井のり子（龍谷大学）

目 次

はじめに

目次

第1章. 「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」設置の意義と背景 1

1. 「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」設置の意義

2. 大学 VC 担当国会議（当時）発足前夜からの現在に至る動き

第2章. 大学ボランティアセンターの「8つの機能」 3

第3章. 関西地区大学の事例研究から大学ボランティアセンターの役割を読み解く

事例1. 意思決定への学生の参画について 13

～ボランティア団体の位置づけについての協議プロセスから～

神戸学院大学ボランティア活動支援室 川口謙造

事例2. 学生スタッフの自発性を促す～Volury 編集委員への対応～ 16

関西大学ボランティアセンター 山村温路

事例3. 大学 VC と学生ボランティア団体がともにつくるイベントへの関わり 19

～「学内ボランティア系団体合同ガイダンス」の事例～

立命館大学サービスラーニングセンター（ボランティアセンター） 山崎智文

事例4. 初心者からリーダー層へと成長を促す取り組み 23

～長期休暇期間ボランティア体験プログラムを通して～

神戸学院大学ボランティア活動支援室 川口謙造

事例5. 個別相談に来た学生へのフォローアップ 27

～A 君の成長とコーディネーターのアプローチ～

桃山学院大学ボランティア活動支援室 脇坂博史

事例6. 大学ボランティアセンター主催事業における学生への関わり 30

～伏見区野宿者支援プロジェクトの事例～

龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター 竹田純子

事例 7. 地域と大学が協働で行う災害ボランティアコーディネーション	33
～台風 9 号水害（兵庫県佐用町）の事例～	
神戸常盤ボランティアセンター 野尻紀恵	
事例 8. 行政、NPO、大学、学生の連携について	37
～平城遷都 1300 年記念祭『発信！NPO フェスタ』企画委員会の事例～	
奈良教育大学ボランティアサポートオフィス 小島道子	
第 4 章. 大学ボランティアセンターの可能性 ～座談会を通して見えてきたこと～	
テーマ 1. 学生のボランティア活動における学びと成長とは	40
テーマ 2. 大学ボランティアセンターにおけるコーディネーターの機能と役割	46
座談会その後. 大学 VC のこれから	49
【参加大学一覧】	52
【参加大学ボランティアセンター（および同等の機能を持つ機関）の概要】	52
【これまでの実績】	54

第1章.「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」

設置の意義と背景

1.「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」設置の意義

多くの学生ボランティアが動いた 1995 年の阪神・淡路大震災や 1997 年のナホトカ号重油流出事故以降、大学等の教育機関においてボランティア活動推進の動きが高まってきた。

関西でも 2000 年以降、龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター（2001 年 4 月）、立命館大学ボランティアセンター（2004 年 4 月）、関西大学ボランティアセンター（2005 年 4 月）と大学ボランティアセンター（以下、大学 VC）の設置が進んだ。ボランティアセンターの設置・運営形態は各々の大学の規模や学部構成、特色や所属部署によって多様である。

大学 VC が増加する中で、その立ち上げ、始動期においては、センター設置の本質的意義の確認と運営形態・事業内容の方針作りのために、多様な事例を紹介し相談にのってくれる場（人）が必要とされた。また、大学 VC の場合、開設後も、リーダー的学生の交代や担当職員の異動、運営体制の変更などによりめまぐるしく状況が変わり、その都度、情報交換し相談しあえる場が求められていた。

ただ、本協議会の前身が始動した時期（2005 年）においては、大学 VC 独自の問題や解決すべき課題を共有し合う場が確立しておらず、悩みを抱えた担当者がその都度相談をしている状況であった。そこで大阪ボランティア協会（以下、協会）は、協会の持つ多分野広域的なつながりや基盤を活かし、学生（若者）がボランティアや市民活動と出会う場や仕組みを関西地区の大学 VC 担当者とともに作り、社会に主体的に参加する若者を育てたいという思いから、大学 VC 担当者が集う場を生み出した。

2. 大学 VC 担当者会議（当時）発足前夜からの現在に至る動き

2005 年 11 月、これまでに協会とつながりのあった筒井のり子氏（龍谷大学）、川口謙造氏（神戸学院大学）らと大学 VC や学生のボランティア参加について話をする中で、一度、関西の大学 VC 職員で集い、情報交換や問題意識の共有ができる場を、という話に発展した。そこで各自で手分けをして、関西大学、佛教大学、龍谷大学と京都、滋賀で大学 VC の支援をしている（特活）ユースビジョンに声かけをしたところ、参加意思のある大学が多数あった。さらにそれぞれのつながりをたどり、京都産業大学、立命館大学にも声かけをした。

そうした流れを受けて、2005 年 12 月 26 日（月）に協会北区事務所で、「関西の大学ボラセン職員・関係者の情報交換会（仮称）」開催に至った（後に「第 1 回」となる）。

上記情報交換会参加者は大学 VC 職員と関係者。この日は、お互いの状況を知り、つながりを深めることを目的に、自己紹介、情報交換と課題の共有、今後について話し合った。

以降、2008 年度末まで全 10 回、大学 VC 担当者の情報交換とネットワークづくりを目的とし

た「関西地区大学 VC 担当者会議」を開催した。その後、第 2 ステージとして 2009 年 4 月より「関西地区大学 VC 連絡協議会（以下、協議会）」を発足。新たに規約を定め、大学 VC のあり方を検討し、大学ボランティアコーディネーターの専門性向上とセンターの存在価値を高め、認知度向上を目的として、事例検討や情報交換を行ってきた。

本報告書では、第 2 章において協議会で積み重ねてきた事例研究から見えてきた大学 VC の 8 機能について詳述した。さらに第 3 章では、各事例の内容と、その事例に対して協議会のメンバーがどう動いたか、大学 VC コーディネーターとしての関わりやその視点について分析した。また、第 4 章では、協議会メンバーで座談会を実施し、大学 VC の今後の展開や可能性について「学生のボランティア活動における学びと成長とは」「大学ボランティアセンターにおけるコーディネーターの機能と役割」の 2 つのテーマで意見交換を行った記録をまとめた。

本報告書が、大学 VC（および同等の機能を持つ機関）担当者の日々の業務の一助となり、さらなる発展へのヒントとなることを期待したい。

第2章. 大学ボランティアセンターの「8つの機能」

立命館大学サービスラーニングセンター（ボランティアセンター） 井上泰夫

大学ボランティアセンター（以下、大学 VC）の機能は実に多岐に亘っており、その位置づけもまた多様である。学生支援の機関に属している場合もあれば、教学機関としての位置づけを有している場合もある。学生だけで運営されているところから、専任の教職員が配置されているところまで、その規模も幅広い。

早瀬・筒井によるボランティアコーディネートの機能分類は、「つなぐ」の機能を中心に、その他の機能が同心円上に配置されている。¹この分類を元に、大学 VC の機能を 8 つにカテゴライズし、再配置を試みた。その結果が、下記の図である。

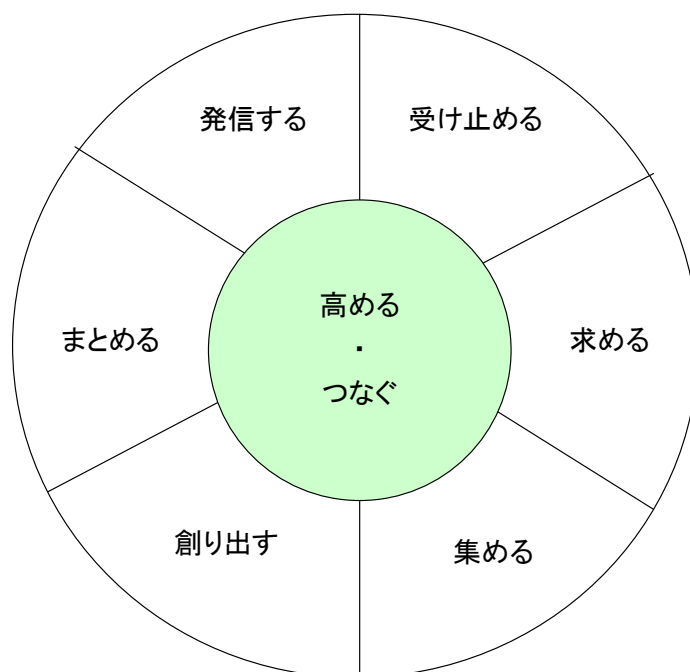


図1 大学 VC の機能

機能	主たる対象	機能の例示
(1) 高める	学生	社会問題に気づく感度を高める
	学生	学生の社会的スキルを高める
	学生	学生の市民としての成熟度を高める
	学生	学生の専門的な「学び」へのモチベーションを高める
	地域・団体	地域・団体の教育力を高める
	地域・団体	地域・団体の問題解決力を高める

¹ 早瀬昇・筒井のり子著、日本ボランティアコーディネーター協会編『市民社会の創造とボランティアコーディネーション』（2009）筒井書房、pp.140-155

(2) つなぐ	大学	地域・団体	大学の専門性と地域・団体のニーズをつなぐ
	学生	地域・団体	学生と地域・団体をつなぐ
	学び	地域・団体	学びの可能性と地域・団体の課題解決をつなぐ
	学生	学生	学生と学生を問題意識でつなぐ
	大学	大学	大学と大学をネットワークでつなぐ
(3) 受け止める	地域・団体		地域・団体の課題と向き合い、その重みを受け止める
	大学、学生		活動を継続する上での悩みやしんどさを受け止める
	学生		多様な学生の活動参加への動機を受け止める
	大学、学生		活動先の現状を受け止め、次善の策を講じる
(4) 求める	学生		地域・団体のボランティアニーズを情報として入手する
	大学		学生のニーズに応じて、活動先を開拓する
	大学		地域・団体のニーズに応じて、学生を募集する
	地域・団体		活動に学生の成長のきっかけを求める
	大学		大学と地域・団体が連携できるフィールドを開拓する
(5) 集める	学生		提供する企画に学生を集める
	大学、地域・団体		地域のキーパーソンを集める
	大学		大学が有する資源を集める
	学生		学生が活動する資金を集める
(6) 創り出す	大学、学生、地域・団体		社会的ネットワークを創り出す
	大学		新たな活動プログラムを創り出す
	大学		より効果的な支援手法を創り出す
	学生		学生がボランティアニーズと出会う場を創り出す
	学生		学生のグループづくり、組織化を支援する
(7) まとめる	学生		ボランティアニーズをまとめる
	大学		学内外のボランティアに関する動向をまとめる
	学生、地域・団体		センターの取り組みを発信するためにまとめる
(8) 発信する	大学、学生		発見された地域課題の解決に向け、情報を発信する
	大学—地域・団体		学内の資源を地域に発信する
	学生		学生の取り組みを発信する

表1 大学VCの対象および例示

上記の表にもとづき、それぞれについて詳述したい。

■機能(1)高める—何を「高める」のか？

大学VCは、高等教育機関である大学の一機関として位置づけられている以上、その活動はただの社会貢献にとどまることなく、ボランティア活動を通じた「学び」と成長を支援することが期待されている。ボランティア活動においても、地域・団体のニーズに即した問題解決だけではなく、課題の発見や組織化など、高等教育における専門的な「学び」の成果を必要とする場面も多い。こうした活動を通じて育まれる力は、単なる知識の蓄積や調査研究手法の洗練化だけでは

なく、社会人として生きていく力、すなわち「市民」としての成熟にも大きく寄与するものである。ボランティア活動への参加は、その場での問題解決にとどまらず、学生が社会的課題や問題発生のメカニズムについて考える機会ともなる。それは、学生が社会的課題の存在に気づく感度を高め、それとどう向き合っていくかという問題解決能力の向上にもつながるだろう。

また、地域と大学生（若者）のつながりの希薄化が叫ばれる昨今、地域の諸課題に対応するボランティア活動は、地域・団体の「リアルさ」を体験する格好のチャンスと捉えることもできよう。大学生活という、いわば「学生にとっての日常」から飛び出し、さまざまな年代の地域住民、ボランティアや NPO・NGO の職員と積極的に交流する経験を通じ、学生は社会貢献に対する関心を深めていくだろう。

しかし、ボランティア活動を「しっ放し」「させっ放し」では、活動から得られる知見を学生の「学び」と成長に昇華させることは困難である。活動を継続していく過程で、学生は多くの悩みやしんどさと直面する。こうしたしんどさを受け止め、支えることが大学 VC に強く求められる機能である。また、活動をふりかえり、そこで起きたできごとや心の動きについて省察（リフレクション）することも重要である。こうした省察には、ボランティアに関する専門性を有する教員または職員の存在が不可欠である。また同時に、活動を経験した学生による相互支援（ピアサポート、ピアエデュケーション）もまた、学生の「学び」と成長に大きな意義をもつだろう。

大学 VC が高めるもの

【学生】

活動を通して

- | | |
|---------------------------------------|-------------------|
| ・ 自立して社会で生きていく力(社会人力)
↑市民力、シチズンシップ | ・ 社会課題への気づき、問題意識 |
| ・ 市民社会の一員としての自覚や行動力 | ・ 自己肯定感(=エンパワメント) |
| ・ モノの本質を多様な視点で捉える力 | ・ 自身が持つ可能性 |
| ・ これからの人生へのモチベーション | ・ コミュニケーション力 |
| ・ 専門的な学びのモチベーション | ・ 活動を通しての目的意識 |

活動現場に送り出すために

- | | |
|----------------------|--------------------|
| ・ 活動参加意識 | ・ 社会問題に気づく感度と感性 |
| ・ 社会への関心 | ・ 社会の問題や活動への理解と共感性 |
| ・ ボランティアに対する興味や関心、意識 | ・ 活動に必要な知識、技術 |

【地域・団体】

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| ・ 地域・団体自身の教育力(受け入れる力) | ・ 地域・団体のスキルアップ |
| ・ 地域・団体の連帯感 | ・ 受け入れ団体、共催団体の教育力 |
| ・ 課題解決力 | |

■機能(2)つなぐ—何を「つなぐ」のか？

大学は、学生、教員、職員、文系・理系の各分野での研究成果、OB・OG など、幅広い社会的ネットワークを有している。こうしたネットワークは、さまざまな社会的課題に取り組む地域組

織、ボランティア団体、NPO・NGO にとって大きな意味をもつ。こうした接点をつくる上で重要となるのが大学 VC である。大学 VC は、大学と地域・団体がつながる接点に位置する機関である。それは、大学の中に存在しながら、地域・団体の情報を学生に発信する拠点となっているからである。そこには、「何かやりたい」「何かの役に立ちたい」と考える学生と、「何とかしたい」という思いをもつ地域・団体がつながるきっかけとなる情報がある。学生は、それぞれの学部での教育を通じて専門的な「学び」を深めている。また、クラブやサークルなど、特技を有している場合も多い。同時に、地域・団体は「学び」のモチベーション向上に貢献しうる材料や、学生の地域生活を充実させうる資源を有している。大学 VC は、そうしたニーズとニーズをコーディネートすることにより、地域・団体の課題解決と学生の「学び」と成長の支援の両面を支援することができる。

また、学生はチームとして地域・団体での課題解決にあたる場面が多く、そうした機会を通じて学生相互がつながり合い、支えあっていくピアサポートも期待できるだろう。同時に、大学 VC 相互がネットワークを形成することも重要である。こうしたネットワークは、日常的な意見交換や交流を促進させるだけでなく、災害時など社会的な対応が議論される際には、情報を交換する重要なツールとなる。

大学 VC がつなぐもの

- ・ 学生と大学
- ・ 大学(学生を中心に)と地域・団体
- ・ 学生と社会の問題及び実践現場
- ・ 学生と様々な生き様
- ・ 学生のやる気と(地域・団体における)役割
- ・ 大学内の学生・教職員(見えざる同志をつなぐ)
- ・ 学生と学生(学内で共感しあえる仲間との遭遇)
- ・ 大学と大学
- ・ 大学を中心とした地域・団体のネットワーク(“大学のある街”としてのネットワーク)
- ・ 地域・団体の課題と大学の専門性
- ・ 地域・団体と大学(「地域の中の大学」を目指して)
- ・ 社会・市民活動と学生(「市民活動」という概念を越えて、社会と並立で)
- ・ 学内資源と学外の課題
- ・ 学び(社会問題への気づき、問題解決のための方法、メカニズムの理解)と実践(実際の問題解決のための提案、具体的行動)
- ・ 大学組織(本体)とボランティアセンター
- ・ 活動をしている団体と学生
- ・ 学生の「やりたい」(学生の学びおよびシチズンシップのアウトプット)と地域・団体の「やってほしい」(若者への期待、問題解決)

■機能(3)受け止める—何を「受け止める」のか？

大学 VC がボランティア活動の啓発・推進するのは、学生の「学び」と成長のためだけではない。地域・団体が抱えている課題と向き合い、その解決のために大学が有するさまざまな資源とつないでいくことが重要である。送られてくるチラシやポスターは、単なる情報ではなく、地域のニーズそのものである。こうした思いを受け止めることによって、はじめてそこに教育的価値を見出すことができるだろう。

同時に、ボランティア活動に参加したい、と相談に来た学生の思いとも向き合い、受け止める必要があろう。就職活動や調査、自分探しのため、など、いくぶんエゴイスティックに聞こえる

ような動機に対しても、それを不適切だと切り捨ててはいけない。地域・団体が取り組む社会的課題の重みを伝えることで、お互いが影響し合い、変化する可能性を秘めているからである。

また、継続的に活動をつづける場合、支援がなかなか功を奏さず、展開しないこともある。学生にとっても、活動に携わる中で、多くの悩みと出会う。こうした場合でも、現状を受け止め、省察を繰り返して支援を継続していくよう、冷静に判断しながらアドバイスすることが重要である。大学 VC はこうした学生のしんどさを受け止め、それを整理しながらアプローチするスーパーバイザーとしての機能が求められる。

大学 VC が受け止めるもの

対学生

- ・ 「何かしたい、でも何をしたらよいかわからない」学生の気持ち
- ・ 学生の気づき
- ・ 自分探しをする学生の気持ち
- ・ 人間関係、集団活動に悩む学生の気持ち、状況
- ・ 学生のエゴ(就職活動に有利、授業の単位ほしい など)
- ・ 学生の自己有用感への期待
- ・ 学生の利他的・利己的なボランティアへの動機
- ・ 学習と活動のバランスなど大学生活での課題
- ・ 社会のニーズと学生の希望(つながるものを探す)

対地域・団体、社会

- ・ 地域・団体のニーズ
- ・ 地域・団体の現状
- ・ 地域・団体の想い(若い世代への期待など)
- ・ 地域・団体の問題解決への期待

対大学

- ・ 大学としての運営方針
- ・ 教員の学びの成果への期待

■機能(4)求める—何を「求める」のか？

学生がボランティア活動を始めたい、と思っても、学生が自ら情報収集に赴くことは現実的でない。大学 VC は、ボランティア活動に関する多様な情報が集約され、そこにコーディネーターが配置されている、いわば情報の HUB となる場所である。

学生が情報を求める際に、まず大学内においてボランティアニーズにアクセスできる場所があることが重要である。また、センターを介して学生のニーズを地域・団体に投げかけ、プロジェクト化するなど、地域・団体と学生と協働する可能性を求めることも可能となる。

こうした拠点をつくることで、情報が一元化され、学生の情報へのアクセスも用意になり、地域・団体もまたどこに情報を寄せればよいかが明確となる。また、学生と学生のつながりも生まれてくるなど、副次的な効果も期待できる。

加えて、学生がボランティア活動に参加する際に、地域・団体に対して学生の特徴や関わり方のコツなどを伝えたり、期待されうる教育的効果を投げかけたりすることにより、活動しやすい環境づくりや教育的配慮を求めることも必要であろう。それにより、地域・団体が学生を単なる「無償のマンパワー」として扱う危険性を回避することもできる。

大学 VC が求めるもの

活動場所として

- ・ ボランティア受け入れ先(活動先)
- ・ ボランティア情報
- ・ 地域・団体だけでなく広域(全国にわたる取り組み、国際分野など)で学生が取り組める活動情報
- ・ 学生の主体性を尊重する活動
- ・ 地域・団体の積極的なコミットメント、サポート(丸投げにならないように)
- ・ ボランティアに関心のある学生、活動する学生(仲間)
- ・ 地域・団体や学生からの素直な声(ニーズ)
- ・ 学生にとっての学びのチャンス
- ・ 活動から惹起される教育的効果(活動の意義、意味、位置づけ)
- ・ 地域・団体など受け入れ側の教育的配慮やサポート
- ・ 大学組織(学内)に対してボランティアセンターへの協力と理解
- ・ 大学組織(学内)に対してボランティアへの協力と理解

■機能(5)集める—何を「集める」のか？

大学 VC は、ボランティア活動の啓発・推進の観点から、情報発信のための企画を実施する。具体的には、先駆的な活動者による講演会や、学内外のボランティア系団体を集めたガイダンスの開催などが挙げられる。こうした企画は、質とともに量、つまり、より多くの学生を集めることが要求される。こうしたデータの推移から、学生のボランティア活動への関心を推察することも可能となろう。

また、大学 VC は、地域・団体のニーズを学生に発信する拠点という位置づけから、地域・団体におけるキーパーソンとのネットワークを形成しやすいといえる。正課科目での受け入れ担当者の会議やボランティアガイダンスを通じ、地域・団体が集まり、情報交換を行う機会となっている。

同時に、大学に属する機関として、大学の有する人的・知的資源を集約し、データベース化することで、地域・団体の呼びかけに効果的に対応することができるだろう。また、学生が活動を展開するための費用を大学がプロジェクト化していくなど、資金を集めるためのファンドレイジングの呼びかけなど、側面的な支援も求められる。

大学 VC が集めるもの

ヒト

- ・ ボランティアをしたい学生
- ・ 学生の力
- ・ 人を集める(人がにぎわう場所とする)
- ・ 各関係団体・部署のキーパーソン

資源

- ・ 大学のもつ専門性(地域社会に貢献しうる知の集成)
- ・ 学内の多様な資源
- ・ 地域・団体の社会資源

情報

- ・ (学生が魅力を感じる)ボランティア募集情報
- ・ 学内外のボランティア情報
- ・ 地域・団体の課題やボランティアしてほしいニーズ

- ・ 学生のボランティアしたいニーズ
- ・ (社会の出来事で) 変遷する大学生の抱える
- ・ 多様な地域・団体での実践事例

お金

- ・ お金(学生や教職員への募金、法人からの寄付の呼びかけ)

■機能(6)創り出す—何を「創り出す」のか？

大学は、教員・職員、大学生・大学院生から、OB・OGに至るまで多くの人的・知的資源を有している。大学 VC は、こうした資源をコーディネートしながら、学生の専門的な「学び」と地域・団体のニーズをつなぐ役割が期待されている。こうした取り組みは、新たな社会的ネットワークを創り出すことである、といえよう。こうした支援システムは、教学的観点から試行と省察を繰り返される。専門家による支援を通じて支援活動は普遍性を獲得し、新たな問題解決手法(メソッド)として確立される可能性もある。

また、問題意識をもつ学生を組織化する過程で、学内外でのボランティアサークルの立ち上げにつながることもある。大学 VC という「場」を介し、学生相互のつながりが創り出される。このような出会いのきっかけとして、学生の活動を発表する報告会や団体の活動を紹介するガイダンスを積極的に展開することが求められる。こうしたネットワークは地域・団体の課題解決に貢献しうるものであり、それらは新たな社会資源となりうる可能性をもっている。

大学 VC が創り出すもの

プログラム

- ・ きっかけづくりの取り組み(講座、イベント等)
- ・ 学生同士がつながるプログラム
- ・ 地域・団体と大学・学生が連携できるプログラム
- ・ 活動者のニーズや学生の成長に結びつくプログラム
- ・ 短いスパンで成果を得られる活動プログラム(学年ごとの交代、卒業するまでの期間限定)
- ・ 関心はあるが、一步を踏み出せない学生を後押しするプログラム

仕掛け・仕組み

- ・ 地域活性化のアイデア
- ・ 時代による学生の質に合わせた上手なアプローチ法
- ・ 先見性に基づいた取り組み
- ・ 大学間のネットワーク
- ・ 学生が継続的にボランティア活動のできる仕組み
- ・ 地域・団体の隠されたボランティアニーズを(これは「掘り起こす」に近い)

■機能(7)まとめる—何を「まとめる」のか？

学生がボランティア情報を求めて大学 VC に来た際、情報をそのまま提供することは望ましくない。学生のニーズは時として不明確であり、情報の海の中で迷った結果、活動への意欲を失うことがある。こうした事態を防ぐには、情報を分野ごとにカテゴライズしたり、ニーズに合わせて発信したりするスタイルを変えていくなどの工夫が必要となる。

同時に、的確にボランティア活動に関する情報を発信するためには、学生の興味関心の動向な

どを把握する調査も必要となろう。また、学内でのボランティア活動に関するニーズの調査や、活動参加者数の割り出しなど、学内における調査の実施も重要である。大学という組織としてボランティア活動の啓発・推進を加速させるには、統計データ（量的動向）を提示することもその訴求力の裏づけとなる。つまり、学生の活動実態など質的動向の把握だけでなく、イベントの参加者数や相談内容の傾向推移などの量的動向の把握も必要となる。

大学 VC がまとめるもの

情報

- ・ ボランティア募集やイベントなど、地域からの情報
- ・ 学生からの相談対応
- ・ ボランティア募集情報
- ・ 活動報告書(学内外にアピールできるもの)
- ・ 多様な人々の様々なニーズ・熱意、声

評価・効果

- ・ 各プログラムの評価
- ・ 各個人の在学中における成果の集約(※活動回数や内容を個別に評価)
- ・ ボランティア活動が学生にどのような効果を与えるか等の評価
- ・ 収集した他の地域・団体での取り組み(普遍化する)
- ・ 問題解決のプロセス(専門家の視点から)

資源

- ・ 地域・団体に役立てるべき大学の資産・力

■機能(8)発信する一何を「発信する」のか？

大学 VC は、大学と地域・団体の結び目に位置することから、学生のボランティア活動を通じて地域・団体の課題に気づきやすいポジションにある。こうした地域課題の解決は、大学としても取り組んでいかなければならない問題である。大学 VC は、発見された地域課題について教員・職員、学生に広く呼びかけを行い、問題意識の発揚や解決手法を求めるなど、積極的な発信に取り組むべきである。

また、逆に教員・職員、学生の「できること」を地域に積極的に発信し、地域・団体のニーズを喚起することも、地域連携の視点から重要である。すでにいくつかの大学では取り組まれているが、学生サークルのデータベース（活動内容や活動状況など）を公開し、地域・団体からの要望とコーディネートすることも大きな意義があろう。

そして、大学 VC は、学生の取り組みを広く発信するためのツールの開発にも積極的に取り組むべきである。ホームページやニュースレターはもちろんのこと、メーリングリストやメールマガジンなど、学内外に広く情報を発信することのできる手段は数多くある。また、Twitter や Facebook といった SNS など、新たな手法にも取り組んでいくことで、より多くの人に情報を発信することができるだろう。

大学 VC が発信するもの

大学 VC の意義や役割を伝えるために

- ・ 学内外へボランティアの教育効果について
- ・ VC の存在・成果報告を学内へ
- ・ ボランティア活動の有用性・学生の活躍の様子を社会へ

- ・ ボランティアコーディネーターの必要性、価値と労力
- ・ 大学が地域・団体の社会資源であること
- ・ 活動報告書を作成する
- ・ 事例を他大学にも通じるモデルとして見せる

学生と地域・団体をつなぐために

- ・ 地域・団体に貢献する学生の姿を
- ・ 「何かするぞ！」という大学・学生の熱意を地域へ
- ・ 地域・団体からのニーズ(ボランティア情報)を大学内へ
- ・ 地域・団体のもつ資源(観光や名産品など)を、学生を通じて
- ・ 地域・団体への情報発信(ボランティアセンターの取り組みなどの広報)
- ・ ボランティアの意義やマナー

情報を届けるために

- ・ ホームページやニュースレターでボランティア情報の発信(活動報告だけではなく、大学 VC として活動していく中で気付いたことを、外部に向けて)
- ・ 学内にくまなく伝える(方法の開発が課題)
- ・ ITと紙媒体の並立
- ・ ホームページ、ニュースレター、メールマガジン(学生の気づきや地域・団体への効果を中心に)
- ・ ホームページなどを使って地域で活躍している学内ボランティア団体を広報する。

以上、大学 VC の機能を 8 つに分類し、それぞれの機能について説明を試みた。大学 VC の特徴としては、高等教育機関を舞台としている以上、教育的要素を度外視することはできない、ということである。それゆえ、従来から中心的機能とされてきた「つなぐ」と並び、「高める」が中心的な機能として位置づけられる。すなわち、大学 VC は大学が有する研究成果、人的資源と地域・団体のニーズを「つなぎ」、地域課題の解決に寄与しながら、課題解決のプロセスを通じ、学生の内面的成長、専門的な学びの伸長、キャリアビジョンの形成など、学生の成長を「高める」機能が期待されているといえよう。

こうした機能の遂行にあたって、大学 VC は一定の専門性を有する職員を配置する必要がある。それは、「ボランティアコーディネーター」と呼ばれる。ボランティアコーディネーターは、地域団体や学生組織、学内機関との信頼関係を構築し、同時に活動の教育的価値を創出する役割が期待される。これらの役割を担うためには、ジョブローテーションのある一般職はなじまない。むしろ、専門職としての配置がなされるべきである。これらのコーディネーターが中心になり、大学周辺のコミュニティとの関係構築および学生のエンパワメントに取り組んでいくことが重要である。

しかし、専門職だけで上記を遂行することは困難である。大学は教育研究機関であり、多様な機関との連携が成否の鍵を握る。こうした連携は、一般職の得意とするところである。また、各大学で取り組まれている「学生スタッフ」制度もまた、大きな効果が期待できる。学生が学生の立場から支援を行う「ピアサポート」「ピアエデュケーション」は、大学 VC の大きな特徴である。こうした多様なプレイヤーが 8 つの機能を複合的に担いながら、その遂行に取り組んでいる。

大学 VC のコーディネーターの機能と役割については、第 4 章の座談会において述べたい。また、これらの機能の整理については、協議会に参加している大学での取り組みを基に整理を行ったものである。ゆえに、雑駁とした未整理な部分も残っているが、それらは現場のリアルさとしてご海容いただきたい。また、これらの機能の精緻なモデル化は今後の課題としたい。

第3章. 関西地区大学の事例研究から

大学ボランティアセンターの役割を読み解く

「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会（以下、協議会）」では、それぞれの参加大学が取り組んだ事業をもとに、事例検討を行ってきた。本章では、協議会が 2009 年 6 月～2011 年 8 月に検討した事例を以下の項目に沿ってまとめた。

- < 1 > 本事例を取り上げた動機・・・取り上げたテーマについて、その理由や問題意識。
- < 2 > 事例内容・・・事業やイベントの詳細説明。
- < 3 > 事例への対応と分析・・・本協議会のメンバーが、コーディネーターとしてどう動いたか、コーディネーターとしての関わりやその視点について示す。また、関わり後の状況や、学生の変化、関係団体などの意見や要望、課題なども示した。
- < 4 > 協議会での質疑・意見をとおした考察・・・協議会での事例検討で、他のメンバーから出た意見を受けての考察や行動。
- < 5 > 事例検討後の展開・期待など・・・事例検討後の成果、next stage への取り組みなど。

なお、事例のテーマが多岐にわたるため、すべての項目が一致していないものもある。

また、前章にまとめた大学 VC の「8 つの機能」のうち、取り上げる事例がどの機能にあてはまるかについて図示することで、大学 VC の役割を明確にすることを試みた。

事例1 意思決定への学生の参画について

～ボランティア団体の位置づけについての協議プロセスから～

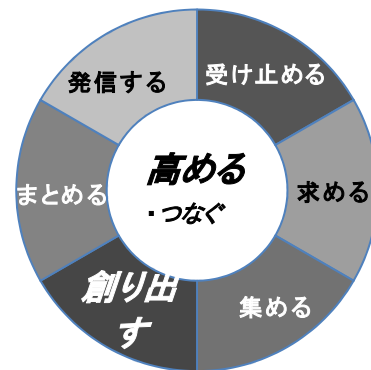
神戸学院大学ボランティア活動支援室 川口謙造

< 1 > 事例を取り上げた動機

学生の自発性は、ボランティア活動への参画に限らず、大学内でのプログラムや制度の意思決定のプロセスにおいても求められる。大学ボランティアセンターでは学生スタッフが参画している。またボランティア団体や他の課外活動団体との連携は日常的に行われる。その中で、いかに学生の自治意識をサポートし、特に制度にかかわる問題は個別の活動や団体の利害を超えて、正当性や公平性を配慮した意思決定がなされるかは重要なポイントではないだろうか。

ただし、理想と現実はほど遠く、互いの利害がぶつかり合って協議が硬直状態になり、いつまでも生産的な解決がつかないことも少なくない。そこで、本事例では「大学におけるボランティア団体の位置づけ」についての協議のプロセスを通して、意思決定への学生の参画のあり方についての問題点と解決の方策を模索してみたい。

主な機能:「創り出す」・「高める」



< 2 > 事例内容

本事例は、本学におけるボランティア団体をどのように位置づけ、大学としてどのような支援をしていくかの協議についてである。大学には課外活動団体の援助制度があり、補助金や部室の貸与、大学施設の利用等が定められている。また学生（団体）の自治組織（学部自治会、体育会、文化会、全体を取りまとめる協議会等）があり、個別の団体の連絡調整や共同プログラム（新入生歓迎行事や大学祭など）の企画と運営を学生の自治に基づいて行っている。

ボランティア団体も課外活動団体であるので、この学生自治のしくみに基づくことが妥当であるが、ボランティアセンター設置以前から、「別枠でボランティア活動及びその団体を支援してほしい」との要望が出されていた。具体的には、「ボランティアセンターを設置して、そこから直接に支援をしてほしい」という内容であった。その理由は「文化会に所属すると共同行事や会議で手が取られ、本来のボランティア活動に集中できなくなる」というものであった。

2005年にボランティア活動支援室が設置され、まず対応を迫られたのが本件であった。担当者は支援室の環境や運営の整備を進めながら、同時にボランティア活動支援実行委員会（以下、実行委）¹で本件の審議を行った。利害関係にあるボランティア団体、学生団体協議会、文化会本部、学生部（当時）等のヒヤリングを行う中で、本件についての意見の相違やコミュニケーションの行き違いがあることが判明した。絡まった解決への糸をいかに解きほぐしていくのか、である。

< 3 > 事例への対応と分析

■コーディネーターの視点と心情

¹ ボランティアに見識のある教員、職員、学生で構成。原則月1回の会議を行っている。

ふたつの考えで迷った。ひとつは、確かに「ボランティア支援」の目的からすれば、学生団体の制度を通さずに直接的に支援を行った方が効率的である。もうひとつは、あくまでボランティア団体も学生団体なので、特別扱いをすることは望ましくない。

また、ボランティア活動の推進においては、体育会や文化会等の地域活動（たとえば、テニス部は子どもテニス教室を開催、吹奏楽部やチアリーダー等は地域行事への出演多数、美術部はポートライナーのホームの装飾など）も対象となる。ボランティア団体だけではない。またボランティア団体の活動への課外活動団体の協力も必要な場面もある。たとえば、災害救援募金などである。そこには「連携」が求められる。その理由で、ボランティア団体を別枠で支援することは、学生団体間に距離をつくることになるまいか。

おそらく、正解はないのだろう。各利害関係者の声と過去の経緯を確認して、あくまで「会議」の積み重ねで解決する（＝正当に合意をとる）ことにした。

■実際の対応と結果

実行委を本件の実質的な意思決定の場と設定して、関係者のヒヤリングや学生団体間の協議を重ねていった。丁寧に記録を取り、考え方の違いの整理や合意点を確認しながら進めていった。

判明したことは、当時は本学に4つあったボランティア団体間で意見が一致していないことだった。というよりも、熱心に新しい制度や大学の援助を要望するひとつの団体と、任意団体（大学に届けをしているサークル）としてマイペースで活動をしていきたいその他の団体とに二分されていることであった。要は、ボランティア団体が団結しているわけではない。

また、学生団体協議会や文化会本部は、過去の協議が決裂した経緯からこのボランティア団体にはよい印象をもっておらず、互いに確執のようなものが根底にあるようであった。学生部（当時）も、時間をかけて協議を取り持つゆとりがなかったようである。結果的に要望するボランティア団体に「放置されている」（＝何もしてくれない）との印象を持たれていたのも事実であった。

以上の経緯を踏まえて、ボランティア団体間の意識の違い、学生団体の支援の妥当性を確認しながら、以下の結論で合意を取ることができた。

- 1) ボランティア団体も学生団体であるので、別枠で位置づけての支援をしない。
- 2) ただし、ボランティア団体の特性を尊重して、将来的には学生団体協議会のもとに、ボランティア団体本部を置くことをめざす。
- 3) ボランティア団体間の連携を強化するために「ボランティア団体交流会」を実施する。
- 4) ボランティア団体本部がない当面は、ボランティア団体が積極的に文化会に加入して文化会の活性化に貢献する。そのために文化会加入制度の規制緩和（仮入会制度の導入）を行う。

< 4 > 協議会での質疑・意見交換

本事例について協議会で検討を行った際に、参加メンバーから以下のような意見が出た。

- 1) 大学によってボランティア団体の位置づけや支援の方法は違うだろう。本学では、文化会に所属しているボランティア団体、ボランティアセンターが直接支援をしている団体が混在している。（関西大学）
- 2) 本学では、かなり民主的な方法で学生の意見を吸い上げるようにしている。そして事前にボランティアセンターとしてできることはこままでというのを伝えている。一定のルールの中で意見を出すという考え方を持ってもらうような仕込みをしておく。（関西大学）
- 3) 学生団体全体の自治活動として筋を通すことは必要なことであり、それを学生に伝えていく役割がある。「学生が社会人になるために教えられること」という視点が必要だ。（京都産業大学）

- 4) 本学ではボランティア団体が 10 ある。もともとボランティアネットワークがあったが実態がない。それは学生がネットワークに配慮する気がないからである。忙しすぎるという理由はあるが、他団体とのネットワークを大切にする気持ちがない。もっと徹底してその団体に入り、顔の見えるつながりをつくる必要があるのではないかと思う。(桃山学院大学)
- 5) 大学ボランティアセンター職員が学生スタッフがその役割を担えるよう働きかけをしている。(関西大学)
- 6) 今回の場合は、教員や職員と対等に学生が協議をすることが求められたわけだが、実際は難しい。ひとつの方法として、学生が会議に挑む前にワンクッションを置いて、審議内容の説明や意見を先に聞いておく方法が効果的ではないか。(関西大学)
- 7) 本学では学生が議論の場に参加できないので、学生の意見を職員が代弁する必要がある。そこで、会議前に学生から意見を聞く時間を持つ。(立命館大学)
- 8) 今の学生はパッションがないわけではないが、ネットワークの真ん中に立とうとしない。立てないのではなく立ち方を知らない。議論の仕方を知らない感じがする。個別に話すと話しやすい人も多いが、そこにどう踏み込んだらいいかわからないのだろう。(龍谷大学)
- 9) 本学では、ボランティアセンターの学生スタッフの活動へ多額の補助が出ている。学生スタッフは体育会系、文化会系に比べて恵まれすぎている。少ないお金の中で、どうやって回していくかを考えるのだと思う。補助の出し方は慎重に考えるべきである。(関西大学)

< 5 > 事例検討後の展開・期待など

事例検討で、大学によってボランティア団体の位置づけや支援のあり方が違うことや、またボランティアセンターの設立から間がない大学も少なくなく発展途上であることが分かった。協議で特に印象に残ったことは、ボランティアセンターは「学生の自発的な参加」を支援する専門的な機関であることから、担当者の意識が高く、それぞれに苦勞しながらも学生の意見を吸い上げるための工夫をしていることであった。

事例検討後の本件の展開であるが、過去の確執はなくなり、要望をしたボランティア団体は文化会に加入して、大学祭での積極的な参画や募金活動への呼び掛けを行っている。もともと力のある団体であったので、文化会の活性化に大きく貢献している。また、その後を追う形で、さらにふたつのボランティア団体が文化会に加入した。

しかし、ボランティア団体間のネットワークづくり（ボランティア団体交流会）についてはうまくいっていない。主体的にボランティア団体の連携をつくるまでには至らない。今後の課題である。

事例2 学生スタッフの自発性を促す～Volury 編集委員への対応～

関西大学ボランティアセンター 山村温路

関西大学ボランティアセンター学生スタッフについて

関西大学ボランティアセンターでは、「ボランティアセンター職員と共にセンターの運営事業に携わり、学生目線から学生のボランティア参加のきっかけ作りを行う」ことを理念とする学生スタッフを置いている。学生スタッフは、大学の組織に所属する学生団体であり、主にボランティアに参加したことのない学生に参加を促すための企画・運営や社会問題をテーマとした啓発キャンペーンなど実施している。

< 1 > 事例を取り上げた動機

大学ボランティアセンターでは、職員以外に学生のボランティア参加を促すために学生スタッフを置いているところは少なくない。また、大学の中には学生スタッフと連携する事業について全体業務量の半分を占めるところもあるであろう。

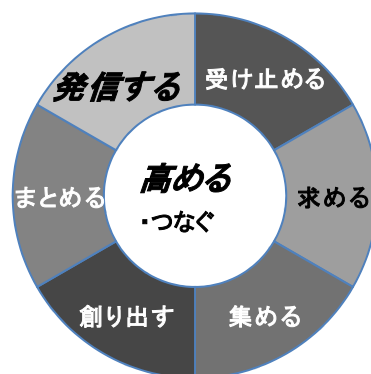
学生スタッフが大学事業に参画することで、学生の「ボランティア」に対する敷居が低くなるだけでなく、学生スタッフ自身も職員や学外の方との関わりの中でさまざまなことを学ぶ機会となっている。

なお、大学組織に学生スタッフを置くことで職員は以下のことに注意しなければならない。

- ・ 学生スタッフが大学事業に携わるという意味（責任感）
- ・ 学生の意見を尊重しつつ、大学事務室の事業としての基準の設定 など

以上のことを踏まえ、ここでは大学事業における学生スタッフの参画のあり方について、問題点とそのあり方について考える場としたい。

主な機能：「発信する」・「高める」



< 2 > 事例内容

関西大学ボランティアセンターでは、当事務室の業務紹介や学内のボランティア団体の紹介などを掲載した機関誌「Volury（ボラリー）」を発行している。

「Volury（ボラリー）」の詳細については以下の通りである。

- | | |
|--------|---------------------------------------|
| ・ 発行趣旨 | ボランティアセンターの事業内容や学生スタッフの活動について学内外に広報する |
| ・ 対象 | 本学学生・連携機関・他大学のボランティアセンターなど |
| ・ 発行回数 | 年3回発行（4月・7月・10月） |
| ・ 部数 | 平成21年度より1000部（vol.2までは500部） |

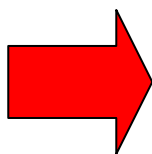
Volury（ボラリー）編集委員について、発行当初は、職員のみで構成していたが、学生が広報誌作成を通じてその重大さや責任感を持つことを目的に vol.3 から職員と学生が構成員になり、職員は学生の自主性を活かしながら支援していった。vol.8 から学生スタッフのみが編集委員となったが、すべてを学生に任せるのではなく、担当職員は学生の編集作業の開始の時期を見て、印刷業者に連絡する指示や学生が作成した原稿を随時チェックしている。

本冊子は大学の予算で発行しているため、職員の承認を得た上で印刷業者に依頼する形をとっている。職員としては、学生の意見を活かしたいという思いもあるものの、人権的要素を含んだ表現など、学生が見落としがちな視点には特に注意している。また、学生のこだわりや考えを聴き、大学側が修正を求める部分にどの程度重要であるか確認し、学生と部署とのバランスを考えて作成している。

今回 Volury(ボラリー)vol.9 作成にあたり、学生から表紙のデザインを発行当初から続いている活動写真の掲載からボランティアセンター学生スタッフのロゴマークに変えたいという意見が出た。



機関誌「Volury」 vol.8



機関誌「Volury」 vol.9

< 3 > 事例への対応と分析

■ コーディネーターとしてどう動いたか

担当職員としてはロゴマークの普及より学生の活動を学内外に伝えたいと考えていた。しかしながら、学生としては学生に手にとってもらえる冊子であるということと、何より、自分たちが考えたロゴマークを表紙に採用したいという思いがあったようである。

「学生に手にとってもらえるものを」という思いが先行しているのであれば、応援したいという思いもあったが、自分たちが作ったロゴマークを表紙に採用したいという思いが先行しているように感じたため、何のために冊子を作っているのか疑問に感じた。

担当職員と上司とのやり取りでは、写真に変えるという案ではなく、何色にするか、ということが問題となった。オレンジ色は冊子が軽いものになってしまう、グレーはインパクトがあるもののネガティブなイメージがある。どちらがよいのか。結果として学生に決めさせることとなった。

業者と担当職員の打ち合わせの中で、担当者からではなく、学外の業者の方から「表紙を変えることは、そのことに本来は自分たちが責任を持たなければならない。手にとってもらえるかどうかひとつ、学内外の関係者にどのように評価されるかもひとつ。それぞれの評価に対して自分が責任を取らなければならない。今は、職員が責任を持って、自分たちがチャレンジさせてもらっているのだということを忘れてはいけない。学生という立場ではあるものの、大学と向き合う立場ではなく、大学側に立って物事を考えなければならない。」ということを伝えていただくこととした。そこには、何でも担当職員から指導しては学生にも伝わりにくい判断したため、あえて業者の方から説明していただきたいという思いがあった。

大学の予算とはいえ、学生スタッフは様々な経費が学生の学費から捻出されていることを自覚しなければならない。今回の件で、編集委員は大学の広報誌作成に携わるという意味を理解したのではないと思われる。また作成にあたっては、まず本学学生にとって有益なものを！という思いが必要で

あり、自分たちの自己満足のためだけに作成しないように伝えていきたい。

■その後の状況―学生の変化

今回の vol.9 をきっかけに、編集委員の意識に変化が見られ、自分たちが大学広報誌に携われるという意味（責任性・重大性）を理解したと思われる。自分たちの意見を尊重するだけでなく、職員や印刷業者の意見にも耳を傾け、学生スタッフは「学生が学生目線でボランティア情報を伝える（広める）」ということを本誌に想いを込めて編集に携わっている。

< 4 > 協議会での質疑・意見をとおした考察

本事例について協議会で検討を行った際に、参加メンバーから以下のような意見が出た。

1) 学生への伝え方について

⇒学生は最初から彼（女）らの取り組みを否定してしまうと、委縮するため指導が難しい。また、成果は褒めると、その後のやる気につながる。プロという観点から、業者に意見をもらうことは、普段から学生に指導している職員よりも効果はあったと思う。

2) 課題の決定権を学生に譲る意味について

⇒学生間で大学が発行する広報誌に携わるという意味を理解することが必要であり、学生は自分たち（学生側）の立場と大学側の立場、そして読み手の立場の3つのことを考えながら作成する必要がある。

3) 学生が担う領域と職員が担う領域について

⇒広報誌などの作成に当たっては、学生がきちんと作れるかどうか職員が確認する必要がある。他大学においては、学外に送付した広報誌の情報によってトラブルが生じたという事例もあるため、最終的には職員がチェックすべきである。

< 5 > 事例検討後の展開・期待

本誌を作成することで、「人に伝える」ということを学生自らの手で追求してもらいたい。また本誌が「ボランティアの情報パンフレット」で終わるのではなく、本誌を作成することで学生へのボランティア参加を促すとともに、学生自身も本誌の編集に携わることで自己の成長に繋がってほしい。そのためには、学生スタッフにさまざまなボランティアを体験してもらいより内容の濃いものに仕上げていきたい。

事例3 大学 VC と学生ボランティア団体がとものつくるイベントへの関わり

～「学内ボランティア系団体合同ガイダンス」の事例～

立命館大学サービスラーニングセンター（ボランティアセンター） 山崎智文

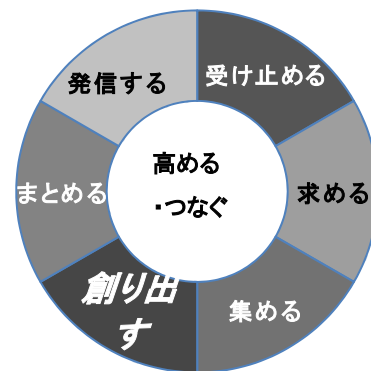
< 1 > 事例を取り上げた動機

大学には様々な課外活動団体があり、学生が主体となって活動を行っている。課外活動は学生の自主的な活動であるが、ボランティア活動の支援やボランティア団体の支援の一環として、ボランティア団体とボランティアセンターとが協働してイベントを行うことがある。

学生の自主性を尊重しながらも、話し合いを円滑に進め、イベントを運営していくために、コーディネーターの関わり方が重要となってくる。「学生と共に創り上げる」という視点を大切にしつつ、どのように学生をサポートしていくか。とくに複数の団体と合同でイベントを行う際の支援のあり方について模索していきたい。

本事例では、2009 年度に実施した「学内ボランティア系団体*合同ガイダンス」をもとに、学内ボランティア系団体への働きかけについて検討する。

主な機能:「創り出す」



< 2 > 事例内容

立命館大学ボランティアセンター（以下、VC）では、毎年前期に学内ボランティア系団体と合同で「学内ボランティア系団体合同ガイダンス（通称：ボラフェス）」を行っている。このイベントを行う目的は、学生のボランティア活動の支援、また、学内ボランティア系団体の支援と活性化およびボランティア系団体と VC との協力体制づくり、ボランティア系団体同士の交流の推進であり、VC としては教育体系の導入段階と捉えている。

2006 年度から始まった本イベントは、学生主体のイベントであり、企画および準備、運営などは、参加団体の代表者が実行委員会を結成し進めている。VC 職員は、学生たちが行うミーティングに毎回参加し、時には助言したり、進み具合が滞っているときはリーダーの学生と話し合い、進め方について提案をしたりという形で関わり、できる限り学生主体で運営する意識を持たせるように心がけている。

2009 年度に開催した本イベントでは、21 のボランティア系団体の参加があった。各団体から代表して 1 人実行委員として参加することになっているが、団体によっては 2 人以上の学生が参加したこともあり、実行委員の人数は総計 65 人であった。4 月からイベント開催までに週 1 回ミーティングを開いたが、各回のミーティングには 20～30 人程度が参加し、話し合いを重ねた。参加団体、実行委員会の人数ともにこれまでで一番多く、本イベントが各団体に定着し、また、学生への認識も広がりつつあることが伺える。

* このガイダンスに参加する団体には、ボランティア団体だけでなく研究を主軸に置いている研究団体や、環境・国際・教育などの分野で活動する団体なども含まれるため「ボランティア系」と称している。現在、立命館大学には、衣笠キャンパスに 30 団体、びわこ・くさつキャンパスに 10 団体ほどのボランティア系団体がある。

一方で、ミーティングでの話し合いがなかなか進まないという現状があった。その要因としては、ミーティングに参加する学生の数が多かったためか、なかなか活発に意見が出なかったこと、本イベントへの参加が団体単位であるということで、実行委員会で話し合ったことを一度団体に持ち帰り、団体の意向を聞いてまた次のミーティングで意思統一するという手順を踏んだことが挙げられる。毎年開催しているイベントとは言え、毎回、新しいメンバーが顔を合わせて実行委員会を組織するため、具体的な活動内容や運営方法についての継承性があまりない。そのような状況でボランティア系団体所属の学生が集まり1つのイベントを創り上げていく際に、どうすればもっと活発に意見交換できるかということが課題となる。

また、各団体が本イベントに参加する主な目的は「新メンバーの獲得」であるが、ここ数年はそれに加えて「ボランティア系団体同士の横のつながり」を求める声が上がってきている。とくに実行委員として活動する学生は、本企画を通して様々な団体があることを知る。そして、様々な分野で活動する学生と交流することで刺激を受け、せっかくのつながりを活かしていきたいと思うようになる。しかしながら、実際のところは思いだけに留まり、なかなか行動を起こすまでには至らないのが現状である。センター側から団体同士がつながるメリットや何のためにつながるのかという視点を示せば、もっと積極的な動きが見られるのではないだろうか考える。

< 3 > 事例への対応と分析

■コーディネーターとしてどう動いたか

例年、各団体への最初の呼びかけは、VCが行っている。2009年度においては、第1回目のミーティングの日程を調整し、最初に本イベントについての説明を行うまではコーディネーターが行った。具体的な内容を決める段階からは学生主体で進めるように促し、その後はサポート役という立場で関わった。すべてを学生に任せるというわけではなく、ミーティングの前後に進行役である実行委員長と打ち合わせをし、次のミーティングの目標を決めたり、進め方についてアドバイスをしたりし、なるべくスムーズに話し合いが進むようフォローした。また、学生がそれぞれの担当に分かれて準備を進めていく中で、個別にも声をかけ、相談しやすい雰囲気作りを心がけた。

また、「せっかくできたつながりを今後も活かしていきたい」という実行委員の声をもとに、コーディネーター側で後期にも合同で何かイベントができないかと検討し、学園祭での展示会と、ゲストスピーカーを招いてのシンポジウムの2点を提案した。学生は、新たに何かしたいという気持ちはあるものの、実際は企画からすべて学生たちが行うのは時間的な問題からも難しいと感じている。そこで、後期に行うイベントに関しては、VC主導で企画を立て、学生には負担のかからないような形で開催できるものを模索した。

■その後の状況—活動の経過

方向性について学生の意向を聞くため、夏休みに入る前にミーティングを開いた。話し合いの中で様々な意見が出され、「何かやるなら協力したい」という声は上がったものの、主体的に動く学生がおらず、各団体の反応も乏しかった。そこで、「みんなで何かやろう・やりたい」という意識の高い学生に個人的に声をかけ、再度ミーティングを開いた。そこでの話し合いから、こちらが提案した企画案をもとに、再度内容を検討し、後期に開催するイベントがいくつか決定した。

学園祭での展示会については、ボランティア系団体合同で行うのは難しいと判断し、最終的には、ボランティア系団体が出すお店の案内地図を作成するという事になった。個々の出店は各団体が自主的に行うが、地図にボランティア系団体をまとめて記すことで、体外的にはボランティア系団体の存在をアピールすることができ、団体同士でも交流を深めることができると考えたためである。

シンポジウム案については、学生からシンポジウムを開催するよりも団体同士でグループディスカッションをする場を設けたいという意見が出、団体同士の意見交換の場として開催した。学内すべてのボランティア系団体に声をかけ、10 団体 24 人が参加し 2009 年度のボラフェスに参加しなかった団体からの参加もあった。

< 4 > 協議会での質疑・意見をとおした考察

話し合いを円滑に進めるためには、場の雰囲気作りも大切である。協議会において、「ミーティングの最中に、グループ討議や机をのけるなどの工夫をして、発表のリードも学生ができるようになった。」という意見が出された。人数と場所の関係上、ただ机を囲んで座るだけの形が多かったが、意見を言いやすい空間作りも必要である。実際、小グループに分かれて話し合いを行ったときは、活発に意見が出され、リラックスした雰囲気での話し合いが進んでいた。

ミーティングの進行については、「実行委員とは別に中立的な人が進行をしたほうがよい」という意見が出された。具体的には、VC の学生スタッフが進行をし、コーディネーターはアドバイス程度にするのはいかがでしょうかという提案がなされた。今回、学生スタッフは、一参加団体として参加したため、他の団体と同じ扱いとした。参加団体としての参加は、学生スタッフの意思であったため、中立な立場としてミーティングの進行を任せるとするのは難しいところもある。しかし、こちらからの働きかけ次第で、関わり方が変わる可能性もあるため、今後検討の余地はある。実際、ボランティア系団体からは、学生スタッフが中心となって運営してくれないかという意見も出ていた。一方で学生スタッフは、他のボランティア系団体とは立ち位置が違うため、ボラフェスへの参加については、どのように関わればよいかを模索していた。しかしながら、お互いに意見を交わすことなく進んでいったため、学生スタッフはあくまでも一参加団体という立場になった。

団体同士のつながりについては、「ネットワークをつくることの大切さをどのように伝えるか」「さまざまなつながり方があるということを知ってもらうことが大事」「他からの学びは重要という実感をどう持たせられるか」などの意見が出された。やはり、コーディネーターがどのようにアプローチするかが重要になってくるだろう。さらに話は発展していき、「各大学のサークル、交流会一覧を協議会で作成してはどうか」という意見が出た。「関西圏だけのサークルの研修を行い、知らない団体が集まって、参考になったという経験をすれば、学内での展開も考えるようになるのではないか」という考えである。「逆に言うと、現状のボラフェスでは、その経験をしていないということもできる」という意見から、コーディネーターからのアプローチの方法については、まだまだ足りない部分があることがわかり、また、もっと可能性があるという認識にもつながった。学生同士の交流だけでなく、コーディネーター同士の情報共有も大切である。

< 5 > 事例検討後の展開・期待

2009 年度後期のイベントについては、さらに学生から様々な意見が出され、新しいイベントも誕生した。とくに国際系の団体は、長期休み中に活動を行うことが多いことから、夏休み明けに活動報告会をしたいと学生から新たな提案があり、ボランティア系団体合同の活動報告会を開催した。また、次年度のボラフェスを見据えた団体同士の交流会も開催され、ボラフェスへの思いを引き継いでいくという動きが見られた。

後期のイベントについては、後期から新たに中心メンバーに加わった学生もあり、前期に開催したボラフェスの流れを引き継ぎながらも、「団体同士の横のつながり」を主軸とした活動が展開されていた。

さらに、これまでにない新しい流れが生まれた。これまで、ボラフェスを開催するにあたっては、VC から各団体に声かけを行っていたが、「自分たちのイベントである」という認識が高まり、後期に中心となって活動した学生によって声かけが行われた。また、その学生が中心となって 2010 年度のボラフェス実行委員会を組織し、より一層学生が主体となってこのイベントを創り上げていくという姿勢が見られた。2009 年度後期に初めて開催したボランティア系団体合同活動報告会も、2010 年度にさらに内容を発展させて開催し、こちらも今後の展開、継続が期待される。

しかし、2010 年度に行った活動報告会については、VC からの呼びかけで開催へと至った。参加団体は変わらなくとも学生の顔ぶれは変わっていくため、どのように流れをつないでいくかが今後の課題である。

事例4 初心者からリーダー層へと成長を促す取り組み

～長期休暇期間ボランティア体験プログラムを通して～

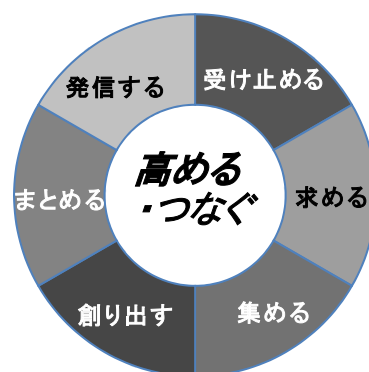
神戸学院大学ボランティア活動支援室 川口謙造

< 1 > 事例を取り上げた動機

ボランティア活動に関心のある学生は増加しているが、関心だけで活動をしていない層をボリュームゾーンに、単発の活動で終わる学生、継続して活動をする学生、他の学生を触発するリーダー層に分かれている。もちろん、まったく関心のない（あるいは偏見をもつもの）も少なくないだろう。

以上の学生の分析をもとに、効果的なボランティアプログラムのあり方を検討しなくてはならない。特に本学では、活動初心者をいかに活動リーダーへ育てるかを課題としている。本事例は、2009年夏休みから実施しているサマーボランティアプログラムについてである。

主な機能:「高める」・「つなぐ」



< 2 > 事例内容

1) プログラム実施の経緯

本学では「ボランティア助成制度」¹を2006年度に設置したが、申請が伸びない現状が続いている。毎年、ほぼ同じ学生団体（主にボランティア団体）の申請に留まり、助成制度の重要な目的である新規の自発的な活動を創発するまでに至ってはいなかった。そこで、実行委員会にて、「まずは活動体験者を増やそう。そのためには『個人への活動交通費の補助』が効果的ではないか」と検討されたのがきっかけであった。その方法として、他大学でも実績のあるサマーボランティア（スプリングボランティア）プログラムを導入した。プログラムで紹介する活動に限定して、交通費やその他の必要な活動経費を補助することにした。

2) プログラムの概要

夏休みや春休み期間は外部からの学生ボランティア募集が増加する傾向にある。それらから厳選し、15～20のプログラムをメニュー化した。選定への配慮は、学生の教育的な観点と安全性を原則に、全体として分野や対象のバランス（偏りが無いこと）である。また予算の上限から、海外でのボランティアは除外とした。結果的には、大学が立地する県内の活動が大半を占めている。また活動形態は行事手伝いなどの1日だけのもの、施設等への数日の通い、野外活動などの宿泊を伴うものと多様である。同時に、学生スタッフによる企画をメニューに組み入れ、学生の企画実践の場ともしている。

3) プログラムの成果

活動メニューを提示するので申し込み時にはある程度の目的意識をもつ学生が多かった。通常時は漠然とした動機で相談にくる学生が多いので違いがあった。活動報告を義務付けているが、学生ごとにしっかりとした学びがあった。（活動現場、対象への理解、コミュニケーションの課題、活動

¹ 本学学生のための助成制度。学生団体枠（上限15万）と個人枠（ただし3人の仲間がいることが条件。上限5万）がある。申請書をボランティア活動支援室に提出し、審査の上助成する。

意識の低さへの反省などである)。また、ボランティア活動で重要なことである「貢献度」については、受入団体への調査が必要であり、次回の宿題としている。

4) プログラムの課題及び協議への論点

課題はいくつかあるが、ここでは上記の経緯から、活動初心者が本プログラムを通して、いかに活動リーダーと育つ（てる）のかを協議した。

< 3 > 事例への対応と分析

■コーディネーターの視点

活動初心者を活動リーダーに育てることは必要なことではあるが容易いことではない。また学生の場合はその特性から活動の継続性をいかに担保するかが課題となる。学生にとっては、本プログラムへの参加動機や活動経験をどのように活かすのかは個別であることはボランティアセンターの担当者は十分に理解している。学生の中には、対人関係の悩み、就職活動への対策と、私的な理由で参加する学生も少なくはない。

解決への視点として、受け入れ団体にプログラムの趣旨を伝え、学生の気づきや学びへの理解をもってもらふこと、単発ではなく数年にわたっての協働意識をもつことがある。また、事前研修会（現場に送り出す前の教育）、事後研修会（体験後の継続的な取り組みへの支援など）のあり方も工夫したいところである。

< 4 > 協議会での質疑・意見を通した考察

本事例について協議会で検討を行った際に、参加メンバーから以下のような意見が出た。

1) プログラムの目的、対象について

プログラムの目的によってプログラムの内容が変わる。例えば、「リーダー育成型」ならば、プログラム数を絞り、少人数のプロジェクト制で学生の育成を徹底して行う。逆に「初心者体験型」ならば、プログラム数を増やし、活動分野等を多様化して幅広い層が参加できるようにする。この事例は何をねらったものなのかが問われるべきだろう。

2) 潜在層の掘り起こし、参加への動機づけ

本学では、まず「ボランティア講座」を開催している。講座参加者を活動実践につなげる戦略である。講座開催においては講師の選定が重要で、外部の講師が学生の反応はよい。また学生の体験談も組み入れると説得力が増すだろう。体験談を話す学生にとっても、自身の体験の振り返りとなる。

また、開催の時期は検討の余地がある。長期休暇前（例えば定期試験前か、試験の最終日）、4、5月のクラブやサークルへの参加に乗り遅れた頃、夏休みの終わり頃（夏休みに何もしなかった学生向け）、冬休み前も海外のスタディツアーの希望が多いので効果的である。

3) 広報について

まず、ボランティアフェスタやボランティア活動報告会などのイベントを実施し、集まった参加者へプログラムを紹介するという方法は効果的である。また、教員に協力を求めて授業で広報をすると効率がよい。そしてなんと言っても学生による口コミの力は大きい。参加した学生に情報を送って、広めてもらう方法だ。

広報で効果的な情報は、活動団体や過去に参加した学生の顔を見せることである。広報のポスターやホームページなどで登場してもらうなどの工夫も可能である。

4) 事後研修会

事後のフォローアップでは、学生が語ったことをコーディネーターが意味づけすることが大切である。例えば、事後研修会で学生から出た課題を、解決に向けて行動に移すように背中を押すなど、次のステップに踏み出せるよう後押し、応援するための研修会などを設けるなどが重要となる。また、アンケートでは、今後どうしたいのか、どんなプログラムに参加したいのか学生の意思を問う設問を加えることも効果的である。

なお、本事例では、自ら企画を立てて助成金を申請するような学生を育てたいという目的もあるため、助成金の情報を知らせることも必要となるだろう。

5) プログラム運営

初心者向けの体験プログラム引率を過去の参加者が担う方法は、それが、リーダー意識を持たせるきっかけとなる。プログラムの企画から関わることで、意識の差に気づくことができるだろう。さらに、ベテランリーダーと新米リーダーの重層化で、チームを構成するなど手法の工夫も考えられる。

本事例のようなプログラムは、受入団体、学生、大学ボランティアセンターの3者協働でプログラムを開発した方がよい。そのプロセスで、学生の活動への理解は深まり、意識が高まるはずである。一方で、学生が地域で活動するプログラムに置いては受入団体の理解が不可欠である。学生ボランティアをマンパワーとして活用したいという意識が強い団体があることも否めず、学生と一緒にプログラムを開発することは団体の負担が大きい場合もあるからだ。そこでまずは1団体からでもよいのでプログラム開発から協力してくれる団体を探し、モデルプログラムをつくることで、新しいパートナー団体の発掘にもつながる。

地域を受け入れ先とする一方で、教育への理解も必要である。しかし学生への教育的関わりを押し付けることはできない。教育的視点を持って地域の団体と学生の間に立つボランティアセンターの役割が必須である。コーディネーターがうまく立ち回ることによってマンパワーとして見ていた受入団体の意識変容を図ることもねらいだ。

さらに次のステップとして受入団体がボランティア講座を企画してもらうことも有効ではないか。

■事例報告者の考察

以上の協議、各大学のご意見を受けて、文末に示すような課題のまとめ【長期休暇ボランティア体験プログラムの流れと課題（協議会事例報告を受けて）】を作成し、その後のプログラム改善に役立てようと準備した。

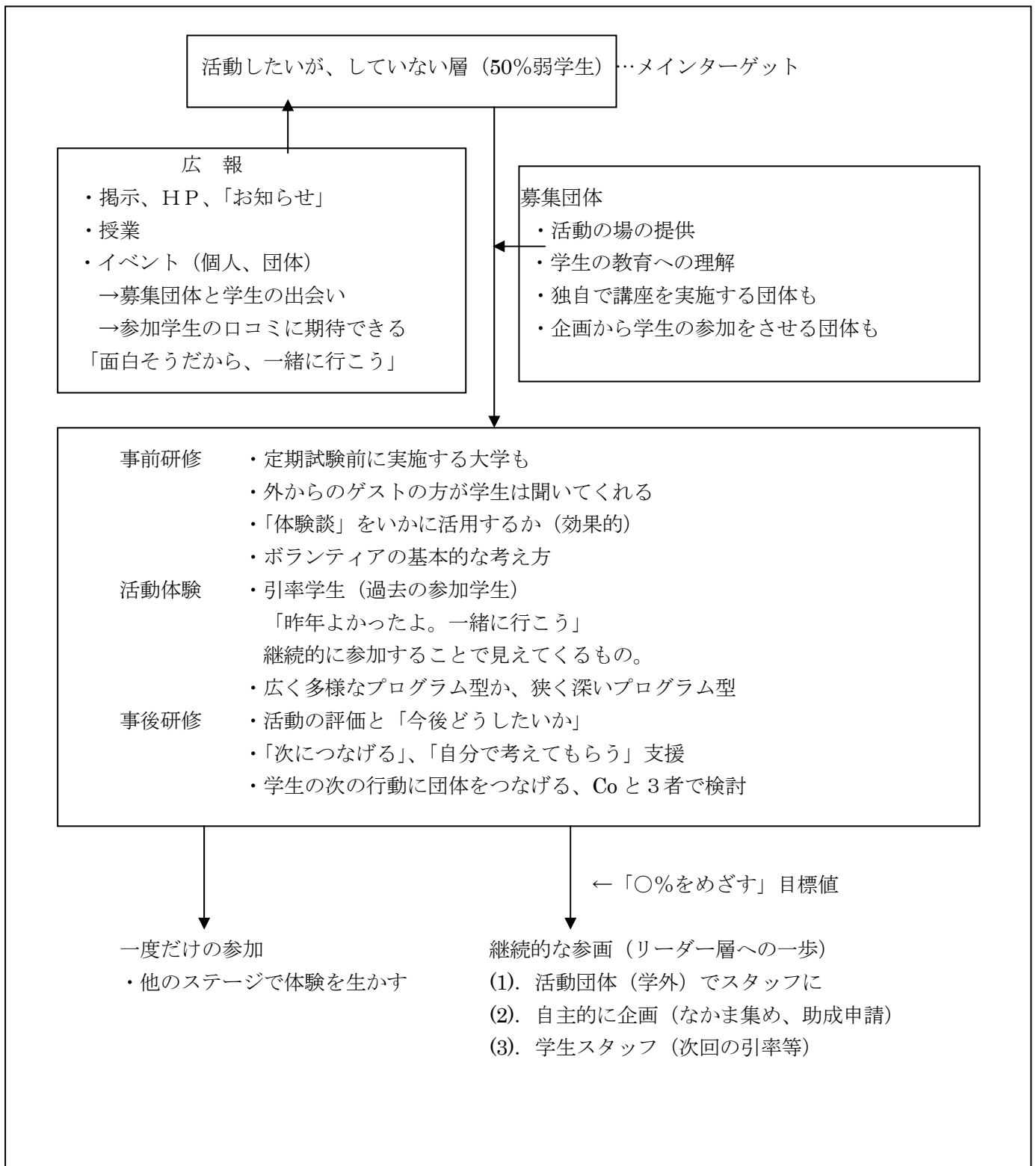
< 5 > 事例検討後の取り組み

事例検討後、2010年の春休みまで総計4回実施した。

学生の参加は50名～100名と順調であり、2010年のスプリングボランティアでは12の活動メニューに対して、73名が参加している。活動先は継続して受け入れていただく団体を基本に、今回はホームレス支援（炊き出し）の活動を新しく取り入れた。栄養学部生を中心に10名が参加している。

活動初心者に、新しい体験を提供するプログラムとしては成功していると言えるが、事例検討でテーマとした、「リーダー層に育てる」プログラムとしてはまだ弱いと感じている。もともと、簡単な目的ではないのだろう。ただし、2011年度は事後研修会に外部講師を招いて、活動の企画づくりや仲間集めの方法などを勉強する機会をつくるための予算化をした。その成果に期待したい。

【長期休暇ボランティア体験プログラムの流れと課題（協議会事例報告を受けて）】



事例5 個別相談に来た学生へのフォローアップ

～A君の成長とコーディネーターのアプローチ～

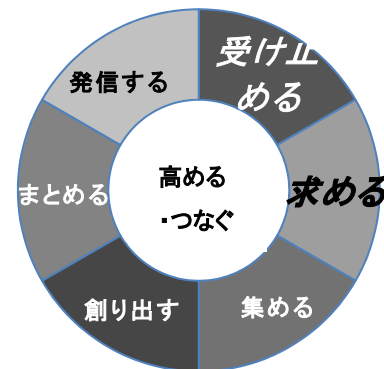
桃山学院大学ボランティア活動支援室 脇坂博史

< 1 > 事例を取り上げた動機

大学のボランティアセンターに自ら訪れる学生の率は決して高いとはいえない。それでも訪問してくれる学生には、無限の可能性が秘められているといえる。それは同時に、本人も気付いていないパワーがある場合もある。ボランティア活動に少しでも関心や興味が芽生えた学生とともに、‘ボランティア活動を始めて良かった’といえるきっかけ作りを大切にしていきたい。

本事例では、コーディネーターが個別相談で関わったA君を事例にその対応について検討を行った。

主な機能:「受け止める」・「求める」



< 2 > 事例内容

「ボランティア活動先の選定－本人のニード(希望)とコーディネーション」

1) 活動希望の焦点を絞る

A君は、ボランティア活動支援室からのメールマガジンで、障害児のスポーツの相手をするグループの活動を知り、興味をもち来室。コーディネーターは、グループに連絡し、定例会に一度参加することを約す。しかし、グループの所在は他県であり、日常的に関わるのは時間的にも難しいと考え、コーディネーターは、A君の関心が、特に子どもにあるのか、スポーツにあるのかを掘り下げて聞いた。その結果、子どもへの関心の方が強いことがわかった。

2) 本人に合った活動の紹介

ちょうど、地域の関係団体から、引きこもりや学習障害などの子ども達へのボランティア活動に大学生の協力を得たいという申し出があり、検討を開始していた時期で、その打合せの会合への参加をA君に促す。結果、打合せの会合に参加した。

3) 活動継続への誘い

このケースは、活動希望者が活動への意欲はあっても、継続という点で、内容的に少し無理がある状況であった。その場合に、活動希望者のニードをともに再考することにより、代替あるいは、より本人にとって良い活動を紹介することができる場合がある。

4) フォローアップ

A君の場合は、子ども分野での活動を少し行っただが、4回生ということもあり、卒業への準備のため、まもなく活動は中止となった。ただ、ボランティアビューローへの来室を機に、学内の障害のある学生への支援活動が、卒業に影響しない範囲で行われている。

< 3 > 事例への対応と分析

1) 学生の来室動機

学生が学内のボランティア活動支援部門（ボランティアセンターなど、以下、VC）へ来室する動機は、おおむね次の4つが考えられる。

- ①何となく、ふらっと寄る
- ②情報（VC からの情報紙・メルマガなど）で関心のある活動があつて
- ③自身が既にしている活動の他の学生への広報希望
- ④単位取得、アルバイト的な活動を探して

このうち、VC を媒体として実際の活動に結びつくケースは、②の場合が多い。本事例についても、②の場合の個別相談とフォローアップについてである。

2) 学生の性質に合わせた活動の選定

学生が、ボランティア活動を継続するには、自身に合った活動と出会うことが重要である。そのために、まず学生の性質に合わせた VC との関わりが必要と考える。

VC との関わりで、活動を考えた場合、以下のようなものが考えられる。

- A. センターのスタッフとして（VC の運営にかかわる）
- B. グループの核（コア）として（新しい活動のグループ作り）
- C. 企画・提案を中心として（キャリア形成・活動のプログラム作り、サークル連合の講習会企画・開催など）
- D. 一人の活動者として（個人的に活動を展開する）

などである。

さらに、上記の4パターンを学外のボランティア活動先に置き換えると、以下のような活動展開が考えられる。

- a. 一人の活動者として参加する中で、組織の中心的な役割を果たせるようになる
- b. 必要に応じて、新しい活動を創造し、メンバーの糾合を行い、既存のグループとは別の組織を構築することができる
- c. 活動先の組織との連携が巧くでき、ボランティア活動の点検や方向性を提案したりできるようになる
- d. あくまでも一人の活動者として活動を継続する

本ケースの場合は、VC との関わりとしては、「D. 一人の活動者として」となる。しかし、前述のように、活動の継続が、物理的あるいは経費的に困難と考えられる場合には、本人のニーズを尊重しながらも、活動による負担を削減できるよう、他のプログラムを探して、紹介することも、コーディネーターにとっては重要な要素（役割）といえる。

■その後の状況—ボランティアの活動経過・変化

A君の場合、4年生ということで、単位修得も絡み、この活動については休止になった。しかし、VC との関わりにより、その他の活動には若干参加する状況となった。

本ケースでは、当初の本人の活動希望があり、VC を訪れた。それを「受け止め」た上で、その内容や継続性（物理的、経費的な側面を含め）を考慮し、新たなプログラムを「求めて」紹介した。ボランティア活動は、活動者の求めるニーズに応える形で進行することが基本だが、そこには継続的な活動が最も求められる。その観点から、ボランティア活動希望者に対して、コーディネーターは、単発的な活動よりは、一定期間継続できる活動になるよう紹介していく視点が求められる。

< 4 > 協議会での質疑・意見をとおした考察

1) 面接

活動希望者に対する初期面接にどのくらいの時間を要しているかでは、5分くらいが多い。また、30分以上かけている場合もあるが、それでもニードが明確にならない場合は、日を改めて来室を促す大学もある。

2) 活動先との連携

活動先への連絡については、現今の学生が、電話が苦手な傾向があるため、社会勉強として意識的にさせるという大学がある。また、学生が直接、活動先と調整をしている場合は、活動先や活動日をVCに伝えてもらい、VCからも活動先に連絡をしている大学がある。

3) 活動後

活動のリピーターは少ない。「活動報告書」の提出が少ない。活動先である登録団体に受け入れ状況を聞くことで、団体との関係も取っている大学がある。振り返りについては、「振り返りシート」の提出をもとに、コーディネーターと学生で振り返りを行い、学生と団体とのつながりを把握する大学があるが、一方で「学生は嫌がらないか」という意見もあった。つまり、フォローアップについては、学生に主旨説明を明確にする必要性があげられるとともに、活動の意味づけを提供するという側面も話された。

4) 活動記録

そもそも「活動記録」は何のためなのか。学生の客観的な分析、また「学生の成育」のためが必要である。記録の観点からは、「活動体験談」が他の学生の活動イメージ作りに有効である。大学当局に対しての報告で、教育的視点からの記録は重要である。また記録カードについて、各大学間での共有も考えられた。

< 5 > 事例検討後の展開・期待

本ケースとは別の事例として、学生のニードを「受け止め」具体的なプログラムを「求め」活動につなげるという事例として、新しく「クリーンキャンペーン」(ゴミ拾い)が始まった。

近年、学生の関心は「環境」に傾いている。エコキャップ、ペットボトルなどの回収に始まって、「ゴミ拾い」が‘おしゃれ’な活動として認識されている。そういう学生のニーズを「受け止め」、夜間のゴミ拾いを若い世代が中心となって展開しているNPOの情報を「求め」て、学生に提供、紹介し、学内で検討した結果、環境関係の活動をしているサークルや、留学生に呼びかけて、「クリーンキャンペーン」を月1回(開講時期のみ)、大学の周辺で実施することになった。

また、秋には、大学祭の実行委員会と連携し、エコキャップのアートやペットボトルのボーリング、英字新聞を利用したエコバックの作成などのコーナーを出展し、3日間で2,000人を超える参加者を得た。

「クリーンキャンペーン」の参加者は現在、毎回、増減はあるが、メンバーは、継続は力なりで、徐々に参加者が広がっていくことを目標に、地道な活動を展開することを目指している。ここでは、単発のイベント発想ではなく、地域に根ざし、着実に継続ができるボランティア活動への視点が芽生えていることが判る。

ややもすると関係機関への啓発・報告としては、数量的な結果を求めがちになるが、大事なことは、学生一人ひとりが、ボランティア活動を日常的に展開しようという思考と、そのための土壌作りが重要で、大学VCに求められるところではないかと考えられる。

なお、エコキャップの処理について、搬入先への搬送方法や経費で悩んでいたが、地元社協がエコキャップ回収に取り組むことになり、大学での回収分についても搬送を引き受けてもらうことになった。ちなみに、初回の回収分のうち、3分の2が大学での回収分であった。

事例6 大学ボランティアセンター主催事業における学生への関わり

～伏見区野宿者支援プロジェクトの事例～

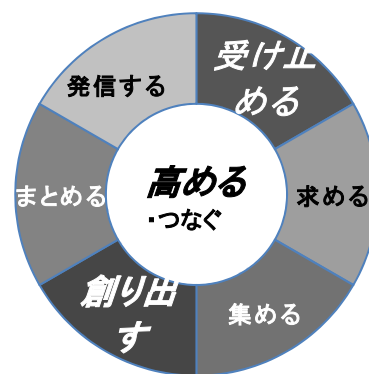
龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター 竹田純子

< 1 > 事例を取り上げた動機

本センターでは、2008 年度末より(特活)JIPPO (以下 JIPPO) と協働して『伏見区野宿者支援プロジェクト』を実施している。今回は本プロジェクトを題材に事例検討を行った。なお、この事例を取り上げた理由は以下の 3 点である。

1. 他団体と協働して実施する継続的なプログラムであること。
2. 学生とコーディネーターと一緒に地域に出て活動し、活動後のふりかえりなども丁寧に行うため、参加学生の変化を感じやすい事例であること。
3. 学生が社会問題を自分のこととして感じやすい事例であること。

主な機能:「受け止める」・「創り出す」
・「高める」



< 2 > 事例内容

このプロジェクトでは、月に 1 回ずつ原則 2 日間で伏見区 3 河川（東高瀬川・西高瀬川・山科川）の周辺に居住している野宿者を学生・龍大関係者（ボランティアセンタースタッフ、教職員）・西本願寺・JIPPO スタッフがチームになって、食料などの支援物資を持って訪問し、世間話をしながら健康状態や困っていることなどについて聞き取りを行い、必要に応じて情報提供や行政への働きかけを行っている。

参加者は毎回変更があるため、支援物資の配布準備を行った後、顔合わせと初参加の学生には簡単な活動に対する説明を行い、西本願寺が用意している車で訪問先に向かっている。活動終了後は毎回、JIPPO のスタッフを交えたふりかえりを行った後、参加学生にふりかえり用紙を記入してもらい、それを元に参加学生とコーディネーターでふりかえりを行い、活動を通じて得た気づきや疑問などを共有する時間を持っている。

2009 年度の参加者は延べ 157 名で、2010 年度 12 月現在でのべ 116 名が参加している。この数字には学生、教職員、JIPPO 関係者も含まれ、学生の中には留学生なども含まれている。特色としては、野宿者支援にかかわった経験者も若干いるが、ボランティア未経験者が圧倒的に多い。

< 3 > 事例への対応と分析

■コーディネーターとしてどう動いたか

参加学生には率直に感じたこと（否定的な感情も含め）を話すことの出来る雰囲気を作り、その中で出てきた話題を深く掘り下げる（振り返りシートに感じたことを書き、それを振り返りの中で話し合いながら、コーディネーターが野宿者の置かれている現状について説明を行い、問題提起を行っている）ことを重視している。それは、このふりかえりを通じて、参加学生が

自分自身の偏見に気づき、この活動を通して知った社会の問題を自分自身の問題として考えることが出来るようになることを目指しているからである。ふりかえりの中で野宿者に対してネガティブな想いを持っていた話や、全く自分とは関係のない世界に住んでいる人のように感じていたと言う話が出てくることが多々あり、実際に出会い、話をすることによって、自分の中の偏見や思い込みに気づく学生は多い。

また、この活動では多様な問題が絡み合っており、このプログラム内だけで問題を解決することが出来ないことを学生に話し、(個人情報には配慮しながらも)出来るだけ情報を開示し、このような問題に対応する場合、どのような社会資源があるのか、考えられるのかと言ったことなども相談することになっている。そうすれば学生が学んでいることがどのように社会と結びついているのかを実感しやすいのではないかと考えている。

■その後の状況—学生の変化

2009年度は1回限りの参加者が多かったが、2010年度はリピーターが増えてきた。ボランティア募集の説明会ができなかったため、新規の開拓があまり出来なかったこともあるのだが、何度か訪問する内に野宿者との関係性が変化している様子を目の当たりにし、リピート参加への意欲が高まってきたのではないかと考えている。また、参加学生の中には、この活動を通じて野宿者問題に関心を持ち、卒論のテーマとして取り上げた学生や、もっと広くボランティアについて知りたいと学生スタッフになる学生なども出てきた。

野宿者との関係はコミュニケーションが深まるにつれ、寄せられる相談なども深刻化しており、このプロジェクトだけでは完了できない事柄が増えてきた。

<4>協議会での質疑・意見をとおした考察

本事例について協議会で検討を行った際に、参加メンバーから以下のような意見が出た。

- 1) VCとしては、あくまで啓発プログラムとして維持すべきだと思う。体制の問題から、学生スタッフの参加がもっとあってもよいのではないかな。

⇒学生スタッフには、彼らの独自のプログラムがあるため、特に学生スタッフだから活動に参加して欲しいとの呼びかけをするつもりはなかった。しかし、もともと学生スタッフは野宿者支援に関心が高く、この問題に関する講演会なども企画した経験もあったため、この活動に関心を示す学生スタッフは多く、活動に参加した人もたくさんいる。また、会議の場などでこの活動についての報告を行っているので、あまり関心の無かった1回生の学生スタッフなども関心を示し始めた。

- 2) 興味本位では良くなく、現地に学生が行って現状を知ってもらうことが大切だろう。野宿者の方の話を聞いて学生が何を感じるか。参加理由は別として、活動後のフィードバックをしっかりと聞いてあげることが大切である。

⇒活動後の振り返りは支援が終わった当日に丁寧に行っている。その為、活動前には話してもらえなかった本音(野宿者に対して持っていた偏見など)などを話し始める学生が多く、自分自身を振り返る場にもなっている。

- 3) 啓発プログラムに参加した学生が、他の学生に対して啓発活動を行ってみても面白いと思う。

⇒継続して参加している学生に、この活動の参加者募集説明会の時に来てもらって、活動について話してもらっている。報告書を作成する予定である。

< 5 > 事例検討後の展開・期待

この活動に関心はあっても、人数制限や授業の関係で参加できない学生が多数いたようである。先日、野宿者支援に関わるイベントのボランティア募集を行うと、こちらの予想以上の数の学生がからの参加申し込みがあった。潜在層が多数存在することがわかった。折に触れて、この活動について学生に向けて発信してきたことが啓発につながったのかもしれない。

その潜在層のことを視野に入れつつ、今後の展開を検討する必要がある。

事例7 地域と大学が協働で行う災害ボランティアコーディネーション

～台風9号水害(兵庫県佐用町)の事例～

神戸常盤ボランティアセンター 野尻紀恵

< 1 > 事例を取り上げた動機

2009年8月9日、兵庫県作用町で発生した大規模な水害。本事例では以下3つの理由から本ケースを取り上げたい。

1. 阪神淡路大震災の被害が最も大きかった地区の一つとしての地域活動にこれまでも学園として参加していた経緯があったから。

■被災地への応援・支援

■災害に強いまちづくり（人のつながりへの参画、ユニバーサルデザイン研究会への参加、震災の語り継ぎへの協働）

■地域活動の活性化（ユニバーサルデザインフェア、一七市拡大版、1.17KOBEに灯りをinながた等）

⇒**地域の特性と学生・学園のニーズを「つなぐ」**

2. 長田区災害ボランティア基金の活用により、学生のボランティア活動の可能性が広がったから。

■商店街とタメ点カード

⇒**ニーズ、社会資源を「集める」「まとめる」**

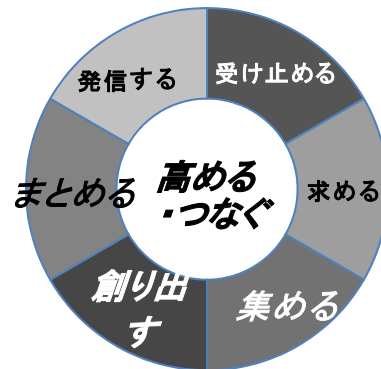
3. 長田区に一つしかない大学として、若者のボランティアが期待される中、学生、地域、学園の思いをコーディネーションでき、次の活動につながった事例だから。

■約1年後の長田区内の水害支援ボランティア

■若者ボランティア団（サンタ団）とのコラボレーション

⇒**学生、地域、学園のボランティア意識や活動内容を「高める」**

主な機能:「集める」・「創り出す」・
「まとめる」・「高める」・「つなぐ」



< 2 > 事例内容

1) 第一段階

2009年8月9日、兵庫県作用町で甚大な水害が発生した。直後に長田区社会福祉協議会長田ボランティアセンター（以下、長田区 VC）から神戸常盤ボランティアセンター（以下、神戸常盤 VC）に連絡が入った。「長田区災害ボランティア基金」を使用する災害である、という連絡であった。そこで、長田 VC と神戸常盤 VC が協働し、両者のコーディネーターが情報収集を行うこと、また佐用町に水害支援ボランティアとして入るための調整を行っていくことを確認した。

主に、長田 VC は長田区災害ボランティア基金活用のための社協内および地域内調整を行った。一方、神戸常盤 VC では、理事長、学長、法人への連絡報告を行い、学園として長田区災害ボランティア基金を活用するかたちで佐用町でのボランティア活動を行うことを決定した。また、神戸常盤 VC に登録している学生へのボランティア呼びかけを、登録のメールに配信した。同時に、災害地へのボランティアに必要な準備物を整えていった。

8月16日に、本学学生と教員および長田区の若者ボランティアグループのメンバーが、本学のマイクロバスに乗り合って、災害復興支援ボランティアとして、佐用町に入った。その際、現地の情報収集や活動場所の選定等様々な面で、長田 VC はもとより、長田区の方々と連携・協働することで、現地活動をスムーズに行うことができた。資金面でも移動手段のマイクロバス運転手の代金は大学から、その他の出費は全て長田区災害ボランティア基金および長田区内での募金によってまかなわれた。

学生は、現地での活動から災害地でのボランティアについて深く考察し、自らすすんで継続支援について模索し始めた。

2) 第二段階

現地活動後、学生は、学内外での災害ボランティア報告会、長田区内小学校の授業での講話等、積極的に行った。学内報告会は、学生が報告内容を作成し、神戸常盤 VC の呼びかけにより、学長や学生が集まる中で開催された。小学校での授業に関しては、長田 VC が行う授業に同行するかたちで実施させていただいた。さらなる支援のため、地域のイベントで手作り商品を販売したり、佐用町名物ホルモン焼きうどんを販売したり、また募金を集めたりと、学生が企画・運営して資金集めを行った。このように学生ならではの工夫した活動を継続した。

3) 第三段階

学生は佐用町での継続支援の希望が強かった。そこで、集めた資金で電気アンカを 100 個購入し 2009 年 12 月 27 日に再度佐用町入りした。電気アンカ購入に至るまでの、学生の思いの集約等は、神戸常盤 VC が行った。また、再度の佐用町入りについては、長田 VC が佐用町社会福祉協議会と連絡を取り合うことで実現した。この日は、地元のボランティア団体が餅つきをし、仮設住宅にお住まいの方々に配布することを企画していた。その企画につないでいただき、学生、教員、長田の若者ボランティアグループのメンバーが再度佐用町入りすることができた。午前中に餅つき、午後は仮設住宅を各戸訪問させていただき、電気アンカを贈ることができた。学生の強い思いの実現のために、コーディネーションがなされたと言える。

3) 第四段階

2010 年 7 月、長田区内に水害被害が発生した。直後に長田 VC から神戸常盤 VC に連絡が入った。情報収集のため、神戸常盤 VC のボランティアコーディネーターが長田区社会福祉協議会に出向き、会議等に参加した。翌日、長田区社会福祉協議会が実施する被害地区の全戸訪問に、神戸常盤 VC のコーディネーター同行し、状況把握に協力する。全戸訪問終了後、長田区社会福祉協議会で行われた支援のための会議に、コーディネーター、センター長、副センター長が出席、協働体制をとる。その間に、センター長より理事長、学長、法人への刻々の連絡を入れていた。

発災後翌々日、神戸常盤 VC 登録の学生、教員、長田の若者ボランティアのメンバーによる、被災者支援をおこなう。被災された方が、寝たきりの老人であったり、外国籍の方であったりすることから、学生は地域課題を発見することができた。この支援では、地域と長田 VC の強い結びつき、そして長田 VC と神戸常盤 VC の協働体制によって、実現することができ、被災者にボランティアの力を届けることが可能となった。

< 3 > 事例への対応と分析

■ コーディネーターの視点

毎年のように起こっている水害等の災害に対し、大学にある VC としてどのようなコーディネーションができるのかを、常に考えている。それは、阪神淡路大震災の甚大な被害にあった長田という地域にある大学として、一つの使命であると考え、だからこそできることがあると考

えるからである。しかし、漫然と被災地にボランティアを送りだすのでは、かえって被災地の現状にそぐわないこともあるに違いない。そこで、災害ボランティアをコーディネートする場合には特に、長田 VC との協働体制をより強め、現地の情報収集に努める。また、社会資源につながる事を大切にしている。

学生は若く、体力も気力もあるため、ややもすれば、何の準備もなく災害地におもむこうとしがちである。しかし、災害ボランティアの最大の目標は、被災者への支援であり、被災者のニーズに合っていないければ、意味を為さない。緊急であるからこそ、万全の体制をとり、リスクをマネジメントしつつコーディネートしなければならない。このような視点を決して忘れず、学生への情報発信、ボランティア募集に際しては、細心の注意を払っている。

災害ボランティアは、学生にとっても共感しやすい活動である。共感を行動に移しやすいよう、費用面、安全面の確保等、コーディネーターがやらねばならないことが実に多い。それらをリストアップしておくことも必要であるし、災害ボランティアのコーディネーションを経験すること、知識、必要な物品が蓄積されていくようにしておかねばならない。

■実際の対応、結果

発災後は、まず神戸常盤 VC のコーディネーターとスタッフ間での連絡を行った。その後、すぐに長田 VC との情報共有を行った。また、ボランティアとして現地入りすることを考え、学園側への情報提供をまめに行った。

どのようなボランティア活動を行うのか、また、どのように現地に入るのか等、あらかじめ計画をしておき、学生へのボランティア募集のメールを発信した。

その結果、学生がボランティアとして被災地に入るにあたっての不安などが最小限ですんだ印象がある。また、学園としても災害ボランティアをバックアップする体制がアップした。災害ボランティアコーディネーションについてのノウハウを蓄積しようと努力し始めた。

医療や保育の専門職に就こうとしている学生にとっての学びは深く、次の活動への意欲を高めた。そして、災害ボランティアに参加した学生は全員、学生スタッフになった。

< 4 > 協議会での質疑・意見をとおした考察

本事例について協議会で検討を行った際に、参加メンバーから以下のような意見が出た。

- 1) 非常に忙しい学生たちが、地域課題などに興味を持って活動を持続するにはどうすれば良いのか。

⇒神戸常盤大学、神戸常盤大学短期大学部は、医療系、保育系であるため、授業時間割が大変窮屈である。また、授業時間確保に縛りがあり、土曜日の補講が多々あること、現場実習が非常に多いことで、継続的なボランティアをしにくい。

しかし、このような専門職に就く学生だからこそ、ボランティア活動を体験することは大切であることを、情報発信しなければならないと考える。様々な形態のボランティアを紹介すること、メールなどのツールを使用して、学生に発信することも大切である。

- 2) 地域との連携を大切にするため、大学側として考えなければならないことは何か。

⇒大学側が、学生の学びや体験だけに重きを置くような姿勢では地域との連携はすすまないと考える。地域にとってもメリットがあるような、win-win の関係性を目指す必要がある。コーディネーターとしては、そのような視点を学校側にも伝え続けることが重要であると考えられる。

- 3) 学生の自主性を育むことが、災害ボランティアで可能か。

⇒発災直後の現地入りの体験を活かし、学生は自ら継続支援に取り組んだり、次に起こった災害に対して支援する方法を議論したりすることができた。災害ボランティアは、若い学生にとって最も共感しやすい取り組みであるからこそ、自主性が育ち、次の活動につながる、または次の学びにつながる可能性を秘めていると考える。

< 5 > 事例検討後の展開・期待

「防災といわない防災」という考え方に共感した学生スタッフが、一般学生にも呼びかけ、大学周辺の住民とのつながりを強める活動を行った。ひとつは学生による「炊き出し」への住民参加への呼びかけである。事例検討後、炊き出しを毎月のように行ったが、地域住民に参加していただき、顔の見える関係づくりにはげんでいる。また、今後は地域住民も使用できるよう、炊き出し鍋や調理道具を備蓄する防災倉庫の設置を学園に提案した。学生の取り組みが学園内でも評価され、防災倉庫が設置される見込みとなった。

また、これらの取り組みはこれまで大学・短大生が中心に行ってきたが、同じ学園の高校生、幼稚園の保護者、教員にも発信を続け、彼らの参加率が高まった。また新たに「ボラセン喫茶」を開催し、顔の見える関係づくりの企画・運営を学生が率先して始めた。

事例8 行政、NPO、大学、学生の連携について

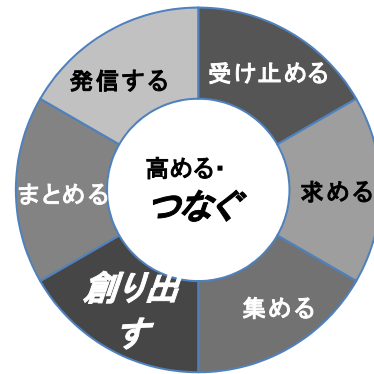
～平城遷都1300年記念祭『発信！NPOフェスタ』企画委員会の事例～

奈良教育大学ボランティアサポートオフィス 小島道子

< 1 > 事例を取り上げた動機

平城遷都 1300 年記念祭『発信！NPOフェスタ』企画委員会へ学生が参加することは、社会参画の在り方を探る具体的な取組みとして意義を有している。また、行政とNPOセンター、大学ボランティアセンター、学生スタッフが連携してボランティア活動の企画、組織作り、実施までを総合的に創り上げることで、地域社会問題の創造的解決に向けて、地域や組織を有機的にデザインする手法を模索したい。

主な機能:「創り出す」・「つなぐ」



< 2 > 事例内容

2011 年に開催された平城遷都 1300 年記念事業の一環として開催された「発信！NPOフェスタ」企画委員会への参加と、学生による独自企画の実践。

○企画委員会への参加

行政、県内の中間支援的NPO三団体、女子大、県立大、教育大学生により構成されたNPOフェスタ企画委員会に参画し、(1)未来の子どもたちへ向けてのメッセージとすること、(2)学生の主体的活動を既存のNPO団体がサポートすること、(3)若者のセンスを生かしたフェスタとすることを提案し合意された。それを受け、県内のNPOの連携と県外への情報発信を目的とした、展示、ステージ等の発表団体への呼び掛け、調整は既存のNPO団体が担当し、学生は独自の企画、広報、当日の運営を担当することになった。

○学生の独自企画「環境をキーワードとした演劇ワークショップ」

県内の小学校に対し環境をキーワードとした演劇ワークショップを提案し実施した。演劇人の協力・指導のもと、4年生3クラスの総合学習として1学期間の取り組みを行った。シナリオ作りから演出、舞台作り、出演までを、各クラスの子どもたちが主体的に行う活動を学生がサポートし、フェスタ最終日に平城宮跡内の屋外ステージで発表を行った。参加者数：出演約 100 名 鑑賞者約 200 名

○メッセージボードの作成

公募により選定された絵を 2 メートル角のボードに拡大コピーしたメッセージボードを作成し、1 週間の期間中展示を行い、一般参加者に「未来へ向けてのメッセージ」を書いてもらうことで、改めて歴史の流れの中において未来へつなぐ自己の存在を確認し、考える機会とした。

○広報活動

若者のセンスを生かしたポスター、チラシ、プログラムの制作を行った。

○当日の運営

1 週間の期間中の参加約 90 団体の会場設営、展示の入れ換え、舞台進行、司会等を行った。

< 3 > 事例への対応と分析

■コーディネーターの関わり

行政、NPO、学生の連携の中で学生の社会参画の在り方を探るため、短期間ではあるが、組織作りを目的とし、行政や社会人の団体と連携する機会のなかった学生が如何に組織とかかわってゆくかのアドバイスを心掛けた。

また、NPOフェスタのメッセージに関する関わりがある。過去と現在と未来（または奈良と世界）をつなぐ“絆”をコンセプトとし、「綺羅☆ならびとから未来の子どもたちへ」をテーマに、1300 年前の平城京から現在の奈良に引き継がれ、また、現在の奈良から未来（または世界）の子どもたちへと発信すべき社会貢献活動等を学び、考える場を提供する機会とするため、既存の活動団体の個々の活動の発信を大切にしながら、いかに今回のテーマとするところのメッセージを参加者に伝えるかを企画委員会以前に学生と討議する機会を多く持つよう心掛けた。

ミッションを異にするNPOの活動紹介として、画一的な表現は避けるべきだが、メッセージに一貫性を持たせるため、各ステージ、ブース毎に未来の子どもへのメッセージを活動の延長線上にあるものとして必ず入れていただくという方向で意見がまとまり、企画委員会に提案、受け入れられ、各団体に協力を要請。メッセージ性のあるフェスタとして県内のNPOの情報発信の機会を提供し、未来へそして奈良から世界へ向けて発信することの一翼を担った。

■その後の状況—学生の変化

その後、地域と連帯することへの抵抗感の減少が見られる。東日本大震災支援活動では学内の組織化、他大学との連携、街頭募金のための許可申請や支援物資の調達など社会資源の活用や折衝等で積極的に動くことができる様子が見られた。

< 4 > 協議会での質疑・意見を通した考察

1) 委員会の構成

学生の割合が高く、実働よりも若者らしい企画とセンス、NPOの裾野を広げる活動を求められた。組織化するための時間的な制約もあり、参加大学は3大学だったが、もっとオープンな形で準備し、他大学の学生の参画の機会を提供するべきだった。

2) 学生企画

「環境キーワードの演劇ワークショップ」についてはNPO法人フリンジシアターが文化庁の助成金を使って指導。小学校の先生方の協力のもと学生がサポートする形を採っていたので、学生の負担感は少なく、達成感は得られた。

3) ボランティアサポートオフィスの学生スタッフ

学生スタッフの組織はピラミッド型ではなくアメーバー状組織を目指している。生物学的には素人の勝手なイメージだが、アメーバーは核を中心に有機的且つ平らかに運動を展開していると考えられる。その集合体のような組織作りを考えたい。その運営については柔らかな組織作りと緻密な連絡と合意が必要となる。週1回のランチタイムミーティングとメールですべての活動の内容は全メンバーが把握し、各活動・プログラムへの参加は各自の判断に委ねている。

< 5 > 事例検討後の展開・期待

行政、NPO、大学、学生の連携の必要性は認識されているものの、実現には困難なものが存在する。その第一点が協働する団体の思惑の違いである。組織として学生が何を担うのかを会議で確認。また学生自身もはっきり認識し、活動に関わるべきである。

第二点目に学生の学外での活動をいかに学内で広めて行くかの課題が浮き彫りになった。今回は事業展開に追われ、学内でのムーブメントの形成までは至らなかったが、この点は各大学における共通課題として今後検討していく必要がある。

第三点目に、学生が社会的経験を積む必要性を学内、特に教員の方々の認識を高めるためには、事前、事後の成長度合いを合わせて伝える必要がある。

今後、この三点に留意し、ボランティアサポートオフィスを拠点に学生が地域社会問題の創造的解決に向けて地域や組織を有機的にデザインする方法を模索する場を提供していきたい。

第4章. 大学ボランティアセンターの可能性

～座談会を通して見えてきたこと～

2011年3月10日、2010年度最後の協議会で、これまで事例をもとに検討してきた大学ボランティアセンターの機能と役割について、改めてメンバーの意見を共有するため座談会を行った。本章は、その記録をまとめたものである。

なお、座談会は「学生のボランティア活動における学びと成長とは」と「大学ボランティアセンターにおけるコーディネーターの機能と役割」の2つのテーマにわかれ、それぞれが希望するテーマに参加した。

また、「座談会（その後）」は、2つのテーマで話しきることのできなかった大学ボランティアセンターの今後の展開について、参加メンバー全員で意見交換を行った。

※以下、「大学ボランティアセンター」は「大学VC」、「ボランティアセンター」は「VC」と略す。

座談会1 学生のボランティア活動における学びと成長とは

メンバー

小島道子（奈良教育大学）

脇坂博史（桃山学院大学）

山崎智文（立命館大学）

川口謙造（司会・神戸学院大学）



川口：学生のボランティア活動における学びと成長ということに視点を置いて考えたいと思います。大学のVCがもたらすもの、学生がその場に来てどのように成長していくか。次に、活動の現場から何を学んでいるのか。学生の変化、成長、体験を語っていきたいと思います。

脇坂：私は大学のVCでコーディネートという仕事をして2年しか経っていませんが、最初に感じたことは、大学におけるVCの場（空間）というのは学生がたむろできる場、あるいは、ほっとできる場にしたいと思っていました。しかし、考えてみると、大学でそういう場っていうのはあまりないのですね。ゆっくり座って落ち着いて話をする空間って、意外に大学にないのだなと思います。今後もそういう集える場にしたいと思っています。

小島：ゼミに入ればゼミ室がたむろする場であったりするんでしょうけれど、1、2回生の場合、ゼミ室がないってということもありますので、たむろする場、いろいろなことを討論する場がないという感じはします。本学は、教員養成の単科大学ですが、教員になったときに、いかにソーシャリティーを持って教育を展開してゆけるかが大事な点だと思っています。社会性とは一朝一夕にできあがるものでも教科書で教わるものでもなく、社会を見つめ、思考し、討論し、問題解決へ向けて行動する力だと思っています。VCはそれを培う場であってほしいと思っています。それは他の学部においても、社会に出る直前の教育過程として必要なことではないかと思っています。

山崎：うちの大学のVCには、学生のコーディネーターがいるのですが、学生ルームという場所があるので、お昼ご飯を食べに来たり、空き時間をちょっと利用しにきたりしています。さきほどからおっしゃっている、息抜きする場ですね。またVCと学内のボランティア系サークルで年

一回イベントをしますが、その時にはサークルの学生も VC に来ます。その中でなんとなく来やすい関係性が築けた学生は、イベントが終わったあとも来てくれます。

川口：VC が箱だけでは学生は来ないと思います。僕の経験でも、大学での VC が設立当初、大学会館の一角で、一人でやっていたのですが、あとで聞いた話、鬚の生やしたしかめっ面のおっさんが一人いるで…って。そういうことは、直接言ってくれないじゃないですか。それを耳にして、やっぱり日頃、にこやかにしないといけないと思いつつ、なかなか難しいな（笑）と思っています。そこで、そういう点も含めて、学生に来てもらいやすくする工夫など話してもらえませんか。

小島：うちは金曜日のお昼、ランチョンミーティングをしています。学生スタッフのミーティングですが、要はお昼を食べているだけなんです。各学生スタッフは、それぞれ自分のプロジェクトを持っています。ボランティアサークルを立ち上げるのも大変ですが、なくすのも大変だということで、社会的なニーズのある時期だけ活動すればいいのだから、サークルにする必要はないという考えを持った学生がいたんですね。そこで、VC の中に、プロジェクトとして立ち上げています。それらの進捗状況を、確認をしたり、行き詰っていたらみんなの知恵を借りたりということなんです。だから、2 コマ目が終わってすぐに、みんな弁当を持って集まってくるんです。適当に食べながら、バタバタと 30 分ほどで終わって、それぞれ授業に戻っていったり、次のコマも空いてる学生はその辺でうろうろもしてるんですが、その時になんとなくお昼食べるだけだからと友達を引っ張ってきたりするんです。ちょっとだけ興味がある人など、それで少しずつ広がっていきました。今はだいたい、10 人から 15 人くらい来ています。全体で 1200 人の大学ですが。



川口：それなりにサロンみたいな感じになっていますよね。

小島：そこでの話で、また新しいプロジェクトになっていくってこともあります。例えば、音楽をやってる学生が、障害者の作業所の人たちがミュージックベルをやってるのを聞いて、演奏活動のサポートをしています。つい先日は、重度の障害者が入院する病院で、作業所の人たちと一緒に出張演奏に行ったんです。障害のある人たちが、初めてボランティア活動をしたという充足感はあったと思います。その活動が、障害者の社会参画にもつながっています。

川口：立命館大学の場合はどうですか。

山崎：VC の場所が、大学院の建物の中にあるので、学部生が立ち寄りにくいってところがあるみたいです。学生スタッフがいますので、うちも週一回ボランチという、昼休みに簡単なボランティア紹介をする場を設けています。そういう時に学生を呼び込んで来てもらっています。多い時で 10 人ぐらい、少ない時で 3 人ぐらいの参加があります。

川口：参加しやすいプログラムを用意して学生を支援して、そこで化学反応が起きたらいいなっていう感じですね。



脇坂：うちは私が行って初めて、ボランティアビューローっていう空間ができたので、その時に最初から心得たことがあるのです。それは、ある青少年担当のワーカーさんから聞いた話なんですが、いろんな相談に若い子達が来た時に、課題の重い子ほどすぐ本題に入ろうとする。だから、「ちょっと待ちっ！」と、お菓子とか置いといて、「とにかく食べなさい」とすすめる。お腹がすいていたら血が上るから、とにかく落ち着かせるために、「お茶、飲み」とか、「お菓子、食べ」とかいうことから入るんです。口に入れるというのは、さっきのランチもそうですけど、一緒に食べるっていうのは共有感があるし、まず落ち着かせるということもあるので、自腹きって安い飴でも買って

置いておくということは当初からしていました。現在、障害者を支援するコーディネーターも同じ空間で仕事していますので、障害のある学生を支援する学生が来るわけです。その学生たちも出入りするようになったので、飴の減り方がちょっと多くなったんですけども（笑）、他の職員も飴を買ってきて、紙で作ったカゴに入れてあります。中には、学生が買ってきて入れてくれることも出てきたりしています。

川口：各大学で、フリースペースみたいなものは確保されていますか。

山崎：VCにテーブルが置いてあって、チラシも置いています。VCの隣に学生ルームというのがあって、そこは基本的にVCや障害学生支援室関係の学生が自由に使えるようになっています。

川口：ボランチ以外に、特に目的のない学生が学生ルームに来るシーンはありますか。

山崎：稀にはあります。学生スタッフの友達も用事があって来たりしています。あと、学内のサークル同士の集まりがあって、その中で学生コーディネーターの学生とサークルの学生が少し仲良くなって、時々会う場所として使っています。

脇坂：うちのVCは隣の部屋に10人ぐらい座れる学生ルームはあるんですけども、今、紹介したのは、カウンターを後ろに引っ込めて、前に机を置いたスペースなんです。そこに飴を置いたということです。4人がけの机と椅子があってまさにフリースペースみたいな感じです。

川口：うちのVCは3回も引っ越ししています。はじめ設計したのは、まず事務スペースがいるのと、残りのスペースは長テーブルで島を作っておく程度でした。そこは学生がミーティングなどで自由に使える場にできたらなっている思いがありました。

小島：うちは学生が使えるスペースが2か所あるんですけど、現在のところは学生会館の奥に部屋があります。VCを出たところが談話室なので、そこに集まる学生を、なんとかVCに引っ張りたいと思い、外向けにボードを出して、募集情報などを出してみたりしています。そしたら、今までボランティア活動をやってなかったけどちょっとやってみようかなと、入ってくる学生もいます。ただ間もなくセンター再編により引越しで場所が変わるんです。新たな場所でまた、新たな出会いがあるだろうと楽しみにしています。

川口：大学の都合で、センターの場所がころころ変わるっていうのは、学生との信頼関係にも影響しますね。さて、学生を集める空間として、センターをどうデザインするのか、また、そこに集まった学生をどう活動につなげていくのか。ただ集まって、留まっているのではなく、やっぱりVCとしては活動を理解してもらい語りが必要になるかと思うのです。ボランティアコーディネーターとして、その場にどう関わっているのか。どんな感じで関わっておられますか。

脇坂：ひとつは、学生スタッフは毎週月曜日のお昼にスタッフミーティングをやっています。ミーティングは必ず機械的に、開校日の月曜日は集って、先ほどのように、ご飯を食べながら打ち合わせをして、地域の方からの活動依頼に対して、そのメンバーを中心に地域のイベントに参加していくという形があります。もう一つは、学生からごみ拾いをしたいというメンバーがセンターに来たので、定期的にごみ拾いが始まって、終了後、交流会をするというのがはじまりました。

川口：ファシリテートしていくということですね。ちょっと話が横道にずれるのかもしれませんが、いろんな学生が来ますよね、期待通り活動に参加できたり、プロジェクトに参加する学生もいれば、なかなかそこまで行かない学生がいます。VCには来るけど、来る動機が、学内で自分が‘行ける’場所を探している、話を聞いて欲しいとか、そういう学生もいますよね。それでセンターは、そういう学生にどういう対応をしていますか。

山崎：立命館では、ボランティア情報のチラシを置いていて、それを見に来る学生がいて、そこで話を聞いて相談にのったり活動希望を聞けば、今ここにある情報だったらこんなのがありますよという感じで紹介します。基本的には、そこで終わっています。話の内容からして、たぶんそ

ういう場を求めているだろうという学生も中にはいるのですが、基本的にはボランティア情報の紹介というところで留まっています。時間に余裕があれば、学生の話も聞いたりはするんですけども…ベースとしてはやりたいことを増やして行って、それに合うようなものを紹介できればいいなと思います。

川口：そうですね、本来 VC は、ボランティア相談にのったり、活動につながるために機能を果たす機関なので、その枠組みの中で対応しているというのは、はっきりしている。

小島：やりたいことを引き出すのは難しいことだという、私の失敗例をお話しします。不登校の子どものサポートをしたいという相談がありました。1 時間ぐらい話して、不登校の支援をしたいということが出てきたんです。そして活動の紹介をしました。2 回目以降、連絡なしに行かなかったらしいんです。センターにも連絡はありませんでした。しばらくして今度は受験のサポートをしたいということで、それも紹介しました。それには 1 回目から連絡もなしに行かなかった。それもしばらくしてから協力団体から言われて、初めて分かったんです。そこで、本人にも聞いたのですが、なんとなく違うような気がして行かなかった、行ったけれどもどうも違うようだというので行かなくなった。それだったら違う活動を探そうかって言ったら、それっきり来なくなりました。他の面でもそのようなことがあった学生だったようですが、せっかく自分探しをしにきたにも関わらず、きちっとしたサポートができなかったっていうのが後悔として残っています。

川口：ボランティア活動をしたいと来室しているのだけど、実は違うと。

小島：違ったのか、私の対応が悪かったのか、押し付けたつもりはないと思っているのですが、誘導してしまったのかなっていう反省があります。極力誘導しないように話を聞いているつもりなんですけど、「あなたに向いてるんじゃない」っていうことをどこまで言うべきなのか。日々、揺れてます。

脇坂：センターへ来る学生でもボランティア活動はちょっと難しいと感じる学生がいるのと、もうひとつは、学生とコーディネーターといっても、人と人なので、合うか合わないかあると思います。どんなにその学生に素養があったとしても、コーディネーターとのフィーリングが合わなかったらセンターで根付かない場合があるので、そういう意味では、他所の人と合わせる、社会資源ですね、いろんなボランティアグループとか NPO とかで、コーディネーターが知ってる人がいるので、「こんな活動があるからいっぺん一緒に行ってみよか」ということで、私も一緒に連れて行って、話しするなかで、先方の人と学生のフィーリングが合う場合があるんです。だから何も自分が活動へのきっかけづくりを全部しなくても、フィーリングの合う人と合わせてあげたら、モチベーションがあがる場合があると思います。発達障害などさまざまな課題を持っている学生でも、当人と合うコーディネーターがいることは大切なので、本当は職員は複数で対応できるのがいいと思います。

川口：学生も、コーディネーターを選べると。

脇坂：現実には一人職場が多いですから、なかなか難しいところですけど、いろんな資源を使って、その学生にあるものを見つけてあげることは重要だと思いますね。

川口：ここで、座談会以外のメンバーから質問があれば出してもらえますか。

井上泰：立命館大学の井上です。今は‘場’をどうやって作っていくのかというお話をされてきたのですが、場を介していかに学生が高まっていったのか、どのようなことを学んでいったのか。VC という‘場’、それに‘時間’というのもあると思うのですが、そこで過ごすなかで、際立つ



て成長した事例があれば、それを教えて頂きたいなと思います。

川口：テーマが「高める」ですからね。実際その学生がどう変化していったかっていうのを、事例を交えて話して頂きたいなと思います。

脇坂：今の大学生で、ボランティア活動を経験してないっていうのは、比較的少ないかもしれませんが。ただボランティア活動に対するイメージを良く持っている学生と悪く持っている学生がいます。良い学生はそこから伸ばしていくというのは自分でもやりますけど、やっぱりイメージの悪かった方があるんですね。その学生がVCへ来た時に、やっぱり何かしたいから来るのですが、そこで先ほどの社会の中でアクティブに動いている人と会わせることによって、活動に目覚めて、はじまっていくということがあります。本人が活動体験を文書にしたものを、機関紙に載せたのですが、高校の時にボランティアに対して悪いイメージを持っていたが、この活動を通してボランティアっていうものを自分の中で整理して、人にも「ボランティアっていい」っていうことを語れるぐらいにまでなりました。自分の活動が、人に語れて、自分の価値として構築できるようにしたいというのは、常に意識してやっています。

川口：奈良教育大は教職の学生が多いので、通常学生の学びや成長はそこにつながるものとして、活動は想定されていますよね。

小島：‘教師力’という言葉在教育大では使うのですが、教師には、教育する力と、もうひとつ、人間性の幅広さっていうのが求められると思うんです。それと脇坂さんがおっしゃったように、自分の価値をしっかりと語れるような学生になってほしいというのはありますけども、高校までのボランティア活動っていうのは、お仕着せの場合が多いと思うんですね。で、大学でまたお仕着せをやるのでは意味がないと思います。ボランティア活動にただ参加するということではなくて、ボランティア活動をクリエイトする、先ほど話しましたようにプロジェクトを立ち上げることによって、組織力も身につけてはならないし、どう運営するのか、助成金をどこから取ってくるのかということも含めて、全部自立してやっていかなければならないので、それはたぶん教師にならない25%の学生にとっても必要な力だと思います。

川口：学生に身につけてほしい力として、教師力、社会人力というようなキーワードが出てますが、ボランティア活動を通して、「何を学んでほしいのか」、「どうなってほしいのか」という、担当者としての思いはありますか。

山崎：学生コーディネーターの活動を通して、自然と学生が成長していくんだなというふうに思います。技術的な面でわかること、議事録の取り方だったりイベントのスタッフの動きとかも身につけていきます。そういうことを通して達成感や自分と人との関係性の成長につながるということを認識しつつ卒業してくれたらいいなと思います。

川口：それは学生スタッフに対するキャリア形成ですね。VCの位置づけは大学によって違うと思いますが、うちの場合は課外活動としてのボランティア活動の支援があって、正課にはない独自の学びや成長ができるという強みを打ち出した方が、大学の中では認知が進むと思っています。

脇坂：ボランティア活動で学外に出て行って、ちょっと年上の人との出会いがいいみたいに思いますね。理不尽な大人もいることも知るし、ボランティアを受け入れることに慣れてない地域に行くともうすごく理不尽なことをされて、怒って帰ってくるわけですよ。でもその場では我慢してる。帰ってきてから、たまった不満がでてくるので聞くのですが、世の中にはいい大人もいてるし、いい加減なやつもいるんやっていうことを知る。それからいくつか年上の人がかんねに熱心にやっているということに新鮮なショックを覚えてくる、触発されてくる。人との出会いでしようね、いろんな世代と出会うということが、ボランティア活動を通して学ぶ大きなことではないかなと思いますね。

小島：学生の価値観の多様化、人間性の幅を広くするっていうのが大切で、それは社会に出て、教員になっても同じことだと思います。特に教員になった場合には、卒業すると同時にほとんど研修もなしに、一国一城の主にされてしまいますからね。クラス 30 人なり、40 人なりの子どもと保護者にも対応しなければいけない。そしたら人数分の価値観があるわけですよ。学生の間に、強くいろんな価値観とぶつかりあうことは大切ですが、その機会として、学内だけでは難しいだろうと思いますね。社会の教育力をお借りしなければ出来ないと思います。

山崎：一番はやっぱりいろんな人と出会えることですね。自分が選んだ活動で、よりよくしたいと燃えている、一生懸命取り組んでいる。その中で自分だけでなく、同じ活動者や例えば参加者である子どもたちと一緒に何かをするとき、自分はどうか関わっていくかどう向き合っていくかと考える機会にもなるし、本当にいろんな世代の人たちと出会って、その中で揉まれながら活動できるっていうのは、大学ではなくてボランティア活動でできるものだと思います。

川口：今、価値観にぶつかるという話が出ましたけども、いわゆる社会的弱者と出会う。たとえば、ホームレスの支援をやっている大学があると思いますが、最近は若者のホームレスも問題になっている。そういう社会的な問題への気づきや学びっていうのが、僕はすごく重大だと思っています。

小島：学生の物の見方ですね。社会に対する見方、ソーシャリティーを自分の中で育てていくかってことなんですけども。その弱者と出会ったことで、気づいて物の見方が変わっていくっていうのは、すごく大きな意味を持つと思います。薬物依存の方の社会参加を目指している活動に、かなりの数の学生が今年は動いています。大人数の価値が根底から揺るがされた。行くまでは、「彼らは弱い人だから薬物依存になったのだ」というふうに言っていたんですね。ところが「誰でもかかる可能性のある病気の一つだ」という捉え方をして帰ってきたみたいで、あれはすごくいい学びだったのではないかなと思います。

川口：僕は、組織力とか企画力よりは、むしろそちらの方が重要だと思います。ただ、1 日だけ活動に行っただけではだめで、それなりに通わないとそこまで意識が育たない。さきほど出たように、多様な価値観とぶつかって自分が変わっていくっていうのは、それなりの継続性も必要だと思うのですが、だからそこはジレンマではあるのですね。

脇坂：ちょっと横道にそれますが、障害のある人自身が社会参加するのがとても大事なことです。けどボランティアが活動を続けていく中で、当事者の側にたって守ってやらなあかんっていう発想になっていってしまっ、結局、本人も当事者も社会と離反してしまうっていうことがある。障害者自身が社会参加するために、後ろから押してあげることが大事なんだということはどう気づかせるかということです。だんだん守る側に入っていってしまうっていうのを、ちょっと危機感を持って見ていたりします。

川口：他の方はどうですか。非常に重要なところだと思います。

白井：そういうケースは学生でなくてもあります。この人を支えたいとか、このケースに対して自分は共感するから活動に参加したいとか。共感性が高まれば高まるほど、当事者寄りの視点になってしまう。関わり方としては、そのボランティアの考えや心の動きを否定はしないです。それはその人の気持ちとして、本人にこの依頼者と関わる中でこう変わったんですねっていう、心の動きを私が伝える中で、なぜその依頼者がそういうニーズを持つのかということと一緒に考えて、社会としてこういう問題があるから、障害者は不便とか一緒に考えていく。それで本人と依頼者の関わり方をもう一度考えるきっかけを作るのが、重要ではないかと思います。



井上泰：それぐらい強く感情移入するってことは実はすごく大事だなと私は思います。というのも、どんなに依頼者に強く共感してその立場に立とうとしても、彼ら彼女らは当事者にはなりえないわけです。社会的に見ると、学生というのは圧倒的にマジョリティなんですよ。その中のごく少数の人がボランティア活動を通じて、社会的弱者、社会的マイノリティーに関わる。一生懸命関わろうとすればするほど、そこにどっぷりはまってしまうということがある。活動をともしながら、一緒に笑ったり、「ここ（活動）から帰りたい、離れたい」と泣いたりするような。それぐらい感情移入してもいいのではないかと思います。そこから、自分のキャリアデザインを見直したり、あるいは、ボランティア活動をパンデミック、流行させようと行動を起こしたりしてほしい。それだけのエネルギーを発生させようとしたら、やはりそれぐらい真剣になって熱くなってほしい。

川口：「衝撃」がボランティア活動の魅力でもある。制度化された授業にはない、外での経験としての衝撃ですね。それは大学側からしたらすごいリスクだけど、大学にある VC は、リスクを含めて学生につないでいる。ある程度覚悟はしとかなければいけないのかなと思います。ただ大学スタッフとしてのバランス感覚も必要ですから、すごいジレンマがあるんですけどね。

白井：大学の VC の中では、学生が次のステップに行きたい、例えば、支援の会を作りたいとか、もっと活動を広げたいと思った時に、支援し続けるのは難しいと思うこともあると思います。そういう時、地域の支援センター、社協や NPO センターと連携をとっているところで、ボランティア協会のような支援センターが支援グループの立ち上げの支援とかも、喜んで相談にのります。そういう団体とつながっておくっていうのは、すごく大切だと思います。

川口：われわれの限界も見極めつつ、白井さんが言われたように、「ここまではできない」という時は外の支援とつながっていくとか、協力を求めていくほうがいい場合もありますね。先ほど脇坂さんが言われたように何でも抱えるのではなく、つなげることです。まさしく、次のテーマが「つながる」と。

座談会 2 大学 VC におけるコーディネーターの機能と役割

メンバー

井上友裕（京都産業大学）

白井恭子（大阪ボランティア協会）

竹村光世（龍谷大学）

松居勇（大阪府立大学）

井上泰夫（司会・立命館大学）

井上泰：大学 VC には「コーディネーター」がいますが、その人たちがどのようなことをしているのか、ということから意見を交わしていきたいと思います。コーディネーターの業務として「つなぐ」ということが中心に置かれています。つなぐという以上、何かと何かが切れている、離れているわけですね。何が切れているのか、まず出し合ってみたいと思います。

井上友：やはり学生と社会ですね。受け入れ先ともいうのかもかもしれませんが。

白井：先ほど井上友さんがおっしゃられた、「社会」を具体的にいうと、地域の受入れ団体や施設と学生をつないでいくということを意味していると思います。

竹村：私は学生という場合、そこに大学も入るのかなと思いました。



井上友：ひとまとめに大学というと、教員と学生というのがありますし、学生－学生、教員－教員というパターンも考えられますね。

白井：少し違う視点だと、ボランティア活動と教育、学びをどうつなぐかという視点もあると思います。

井上泰：私たちが考えるファクターとしては、学生、大学、教員、ボランティア、社会、地域、受入れ団体、教育が挙げられると思います。では、これらをつなごうとするとき、どんな工夫をされているのか、また、どのつながりを重視しておられるのかについて意見交換したいと思います。

竹村：私は、学生と地域をつなぐことに取り組みたいと思っています。学内という「閉じられた空間」ではなく、キャンパスの外に出て、いろんな人や価値観に出会ってほしいと考えています。

松居：私は、学生にどんどん活動に参加して欲しいと思っています。いろんな価値観に出会うことで、今まで知らなかった社会の一面を見に行くことができる、そのように学生に声かけをしています。あと、学生と学生を意識してつなぐようにしています。「同じような活動をしている仲間はいないか？」という相談があったとき、「こういう人がいるよ」と学生と学生を結び付けることに取り組んでいます。

井上友：学生とボランティアというのもあるのかなと思います。そもそもボランティアにあまり関心のない学生に「ボランティアってこんな魅力があるんやで」というのを教えるのも「つなぐ」ことになるのではないかと思います。

井上泰：立命館大学では、サービスマーケティングという視点で、ボランティアと教育をつなぐということに主眼を置いています。もちろん、その過程で学生と社会がつながっていくことにもなると思いますが、では、こんなふうにつないでいったという実例をそれぞれ出していただけたらなと思います。

井上友：京都産業大学では、学生と学生というのが多いですね。学生はあまり地域に出ていかないので、まずはサークルに加入することから勧めてみます。「こういうサークルあるけど、どうやる？」というように、サークルを管轄する部署と協力しながらつなぐことがあります。

井上泰：実際の成功例を教えてください。

井上友：海外に住宅建設を支援する国際協力系のサークルの運営の相談に乗りながら、活動を探している学生に紹介したところ、活動に参加したということがあります。

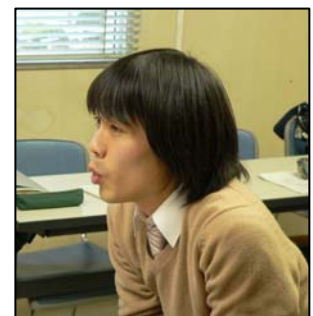
松居：大学にボランティア受入れ先の方々に来ていただき、活動を紹介するイベントを定期的に行っています。そのイベントの前後に、学生も参加できる意見交換会を行っています。そこで、学生と地域、大学と地域、地域と地域がつながっていくことを実感しています。

白井：神戸常盤大学でも、同じように地域の人たちを大学に呼んで炊き出しをしたり、大学で学生と一緒に活動しているという事例がありました。

竹村：具体的な話ではないのですが、ボランティア相談に来る学生に「こういうボランティアがあるよ」と紹介するコーディネーターが一番中心になると思います。

井上泰：大学 VC がさまざまな機会をセッティングし、そこからつながっていくという感じがあります。みなさんにお伺いしたいのですが、コーディネーターしていて、「つながった」という瞬間の手ごたえみたいなものってありませんか？

竹村：実際に受け入れ団体から「〇〇さんはこんなふうにこういう活動をしてくれてて、すごく助かってます」という連絡がくることがあります。龍谷大学では、学生から受け入れ団体に直接



連絡をとって自分で行くシステムなので、団体から反応が返ってくるのはすごくうれしいですね。

井上友：京都産業大学では、ボランティアの紹介だけではなく、助成金の取り方や組織運営の相談にも乗っています。実際に、海外に行ってきた国際協力系団体が帰ってきて、「ちょっと聞いてくださいよ、井上さん。こんなことがあったんですよ！」みたいな報告をしてくれたとき、「あ、ちゃんとつなぐことができたんだな」と実感します。フィードバックを返してくれるというのは、すごく大きい意味があるんだなと感じています。

井上泰：大阪ボランティア協会では、どのようなつなぎ方をされていますか？

白井：学生の思いをしっかりと受け止めてくれる団体に意識してつないでいることが多いです。やっぱりやりたいという気持ちを持って相談に来る学生ばかりなので、つなぐ先の受け入れ力とか受け止め力ってすごく大切だと思っています。学生が、具体的な希望をもっていて、それに合致する受け入れ先があればそこにつなげるのですが、受け入れ先がないこともあります。そうした場合、受け入れ団体の受け入れ力というのをもっと上げていくための働きかけも視野に置いたコーディネーションに取り組んでいます。

竹村：区役所などのイベントに、学生ボランティアに来てほしいという依頼があったとき、なるべく学生にとって学びが大きいよう、説明会やふりかえりの場をもってもらうようお願いをしています。また、お昼ご飯を食べられるよう、シフトを考えていただくよう依頼もしています。また、学生を集めるポイントなどを共に考え、工夫する中で、少しずつ改善されていっているのを見ることがあります。

白井：そうですね。例えばお昼休憩も何もなく、とりあえず学生に来てほしいみたいな依頼をしていた団体が、次の年にちゃんと1日の活動の動きとかを募集チラシの裏とかに書いておられたりします。「おお、すごい。成長してる」って思いながら、そういうところにつなぎたくなったりします。

井上泰：やっぱり大学VCのコーディネーターは、まったく知らないところにはなかなかつなげないという感があります。大学VCは学生を送り出す機能を持っているので、安心して送り出せるところにせざるを得ない面があります。また、学生のニーズも引き出さなくてはいけないし、そこに専門性が求められると思います。先ほどからいくつか出ている、受け入れ先に対するサポートの具体例をもう少し教えてください。

竹村：行政からのヒアリングで、「学生にこの活動に関わってもらいたいけど、どうしたらいいか？」という相談など、漠然としすぎて難しいことがあります。そんなときには、大学での募集だけでなく、他のNPOなどとの協働をアドバイスしています。そこから活動が展開したりするなど、地域の団体を紹介することも意義があると思っています。

松居：大阪府立大学でも、団体同士の意見交換会などで交流する機会を設けたんですけど、そこでの出会いや交流がうれしい、役に立ったという声を聴きます。意外に団体相互の交流ってそこまでなかったりするのです。

井上泰：それは最初からねらいとしていたのですか？ 予期せぬ成果という感じですか？

松居：ある程度想定していました。ただ、意見交換会自体は去年から始めたところなので、まだ何ともいえないです。

井上泰：いろいろ出てきましたが、まだ今はつなぐことができていないというものはありますか？たとえば、大学の先生が「学生をこんな活動に参加させたいのだけど、活動先ないか」というような感じで教員と地域のコーディネートをされたりとかはありませんか。

竹村：大学の窓口として関わってほしいという依頼を受けることがあります。ただ、予算がほし



いとか、動ける事務がほしいとかという要求であることが多いので、あまりいいパターンだとは思っていません。それだけ知名度が出てきたとポジティブに捉えたらいいのかなと思っています。

白井：「ボランティア論」など、授業の活動先として団体を紹介してほしいという相談はあります。「団体とつなぐところだけをお願いしたい」といわれることもあるのですが、そこだけではボランティアの意義や大切な部分が伝えられないと思っています。カリキュラム全体の設計の相談をしたいとかならお手伝いできるのですが。

井上泰：先ほどから、受け入れ団体へのフォローアップの重要性が指摘されてきましたが、そう考えると大学 VC は大学の一機関でありながら、大学から「半歩、外に足を出している」ように思えてきます。そうした地域への働きかけの一方で、学生からどうやってニーズを引き出しているのかについてお伺いしたいと思います。

松居：「何となく来ました」という学生でも、話を聞くとどこかにきっかけがあったりするので、それを引き出すよう意識しています。その上で、同じ学生の仲間や活動先を紹介しています。



井上友：相談に来た学生への対応として、話し方ではコーチングや、指導的な話し方をする場合もありますし、本人に気づきを与えるファシリテーションのような方法も意識して取り入れています。たとえば、ボランティアのイメージというのをはっきりと持って活動を探しに来る学生には、ニーズに基づいて団体を紹介する純粋な意味でのコーディネーションを行います。でも、漠然と何かをやってみたい、という学生に対しては、ボランティアに関する説明をした上で活動を紹介していくなど、アプローチを変えています。

竹村：学生のニーズを引き出すために、学生スタッフが相談に受け答えするという形でたくさん入ってもらっています。その場で活動を紹介するだけでなく、次に来てくれるような声かけをするなど、何回も通ってもらうための取り組みに力を入れています。

井上泰：コーディネーターは学生への働きかけに加え、受け入れ団体との顔の見える関係やネットワーク作りにも取り組んでいますよね。時には受け入れ団体に働きかけ、アドバイスもしながら両者をつないでいくという役割が求められていると思いました。私たちは日々現場にいるから気づきにくいのですが、切り離された何かと何かをつなぐ、再構築するというコーディネーターの機能は、じつは高い専門性を要求されることなのかもしれませんね。

座談会(その後) 大学 VC のこれから

川口：「ボランティアセンターのこれから」というテーマで、現在できていないこと、今後どうしていきたいのかをお話いただけますか。大学の中での認知度を高めていく、地域の中での大学の存在価値を高めるといったこと、コーディネーターの体制の課題もあるでしょう。

竹村：大学とボランティアセンターをつなぐという課題があると思います。大学の中で、そもそもそういう部署があることを知らない職員がたくさんいます。本学はコーディネーターが4人いますが、全員が正規職員ではない。それだけに他の部署の職員と接する場面がすごく少ないと思います。その中で、どうやってボランティアセンターの取り組みを他の職員や教員にどう伝えていったらいいのかは大きな課題ですね。

白井：学外との関係でも、雇用期間が決まっているとやっとな地域の人に顔を覚えてもらっても、担当が変わるとまた最初からの関係作りになる。関係や専門性の積み上げの難しさを感じます。

竹村：私自身も、地域の団体の方と話をしたときに、「2年前のコーディネーターさんと話したの

だけだね」というようなことを言われる。その時には、「申し訳ないな」と思いました。

井上泰：大学のボランティアセンターにとって、コーディネーターは大きな存在ですよね。コーディネーターがいなくなったり、人が変わってしまったら、地域団体と縁が切れてしまうというのは、問題だと思います。それは何とかしなくてははいけない。

井上友：京都産業大学の場合は、正規職員がボランティア室に配属されています。ただそうすると異動の問題がでてきます。団体の情報などは引き継ぎをするのですが、学生の受け入れ先との関係は、やっぱりそこで一回途切れてしまう。団体同士の付き合いにしていけないとだめなのかなと感じています。

井上泰：先ほど「顔の見える関係」と言われていましたが、確かにコーディネーターの仕事は人と人とのつながりで成り立っているから、「待遇」の問題を含めて、もう少し長期的なスパンでコーディネーターが継続して仕事ができるシステムができればいいですよね。他には、大学 VC は大学にとってどんな効果があるのか、学生にとってどんなメリットがあるかをきちんと整理して言えるような力が必要ではないかと思っています。

川口：センターの実績について、みなさんどうやって見せられているのですか。

竹村：心がけているのは、ウェブをなるべく早く更新するようにしています。「これだけのことをしてます」というものを見てもらえるようにしたい。関東の大学などで、「新しくボランティアセンターを作りたい。どういうふうに活動されているのか教えてほしい」とヒアリングに来られることがわりと多いのですが、そういうニーズに対しても「こんな視察がありました」とホームページにアップして、「これだけ外から注目されている」ということをアピールするようにしていくことも方法かなと思っています。

今年度（2010 年度）はセンターの 10 周年記念のイベントをやってきました。その一環で「全国ボランティアコーディネーター研究集会 2011」（JVCC2011）を受け入れたのも、「学外からこれだけ注目されている」ということを学内で知ってほしいという思いがあったからです。

井上泰：そうですね、立命の場合でもウェブを頻繁に更新するようにしています。「写真」と「学生の声」と「地域の声」、できるだけこの 3 つをそろえてホームページに上げるようにしています。あとは研究分野を調べて、活動に関係する分野の先生に、学生への活動の周知をお願いしています。

竹村：今年度から始めたのが、「基礎演習」とか、「フレッシュマンゼミ」とかの新生を対象にした 30 分、60 分、90 分の活動ガイダンスのコースを作りました。「呼びがあればいつでもコーディネーターが行って説明しますよ」と先生たちに呼びかけてやってみたのです。

松居：大阪府立大学は、開設から 1 年ですので、年間報告書を作ろうかなと思っています。それをツールにして、学内各所に知ってもらおうと。私は VC の採用ではありません。また正規職員でもない。別の部署に採用され、VC の仕事もやっているという状態なのです。メインの業務は他にあるのです。ですから、本学では VC に専属のスタッフがいらないんです。その程度の認知でしかないんですね。そこに専属のコーディネーターが関わることによって、どう学生のボランティア活動が深まっていくのか、どう発展的なことをしていけるのかを物語る必要があるのだと思います。しかし、全然できていない。

「これだけ学生が体験できて、一方で地域からもこういう評価が返ってきた」ということを立証していけないといけないと思います。「教育的効果」であったり学生にとっての満足度や、地域からの声をできる限り拾い、それを発信していくことが必要だなと思っています。

脇坂：大学が学内に VC を置く理由には、「花を添える」というところもあると思うんですよ。さらにそこにコーディネーターを配置する大学は、数少ない。つまり、大学全体では、コーディネ

ーターの必要性は認知されていないと思います。でも、それは絶対に必要であり、この報告書の提言としての役割は大きいと思いますね。

井上泰：「学生のニーズを引き出す」ということは、本来は大学の学生支援として、やらなくてはならないことだと思います。しかし、コーディネーターがいないと「送り出す」だけになってしまう危険性があります。学生を送り出した後、受け入れた団体でどうだったのかをきちんと把握できていないという課題があるのです。コーディネーターは半歩片足を外に出しているから、地域の人たちの生の反応を聞くことができる。しかし、受け入れ団体とつながっていない、またはつながりが薄いと、学生がどんなふうに学んだのか、どんなふうに成長したのかがわからない。そうすると、大学の中でのボランティアセンターの意味づけが、とても小さいところに留まってしまうのかなと思います。

白井：そうですね。コーディネーターがキャンパスの中だけの視点でいると、学生がボランティアに行き行って持ち帰ってきた学びを、多様な価値観に組み替えるプロセスに寄り添えない。また、そこへの働きかけが弱くなってしまうと思います。学生の学びや人間力をつけていく現場に寄り添うスキルや知識こそがコーディネーターの専門性ではないかなと思います。

脇坂：ゼミなど授業でボランティア活動を取り組む場合の教員の関わりは、社会に対する意識が薄いと思います。それは学生のことしか見てないからでしょう。そこで、それができるのが、大学VCのコーディネーター、すなわち私たちの役割です。

川口：学生を高める、すなわち教育については学校のスタッフ全員がミッションとして求めているところですね。それを前提にして、地域を高める、学生と地域の相互が高まるという視点はボランティアセンターの役割です。

さて、今後、大学VCはどうなっていくんでしょうね。

竹村：今年1年間だけでも、「大学につくろうと考えてる」みたいなヒアリングがすごく多い。今後も、増えていくのではないかと思いますね。

小島：つくるといっても、「施設だけつくって」という感じで視察にこられることがある。それはすごく危うい認識で、コーディネーターが必要だし、経費もかかる。大学としてきちんと位置づけをしているのか心配になります。何となく社会的な流れとして、「大学として置いておかなければ」というところもある気がします。

井上泰：他大学から本学にヒアリングに来られたら、ボランティアセンターは「人」と「場所」と「お金」が重要だと言っています。「人」はコーディネーターで、地域や受入団体について理解が深い人を専任として配置すること。それから学生が安心して立ち寄れて安心して時間を過ごせる「場所」をつくること。そして、それを維持、運営する「お金」が必要ということです。それをどこから調達してくるのかというのが腕の見せ所だと話をしています。

川口：本報告書は、これから立ち上げようという大学にお届けすることも1つの目的でしたね。

白井：そうです。この座談会の話はとても重要だと思います。

川口：本報告書には失敗事例など試行錯誤が詰まっている。ボランティアセンターは、ちゃんとしたビジョンをもって設置してほしいというメッセージですね。（了）

【参加大学一覧】

■2007 年度

関西大学／京都産業大学／神戸学院大学／桃山学院大学／佛教大学／立命館大学／龍谷大学／ユースビジョン／社会福祉法人大阪ボランティア協会（事務局）

■2008 年度

関西大学／京都産業大学／神戸学院大学／聖トマス大学／奈良教育大学／桃山学院大学／佛教大学／立命館大学／龍谷大学／ユースビジョン／社会福祉法人大阪ボランティア協会（事務局）

■2009 年度

大阪府立大学／関西大学／京都産業大学／神戸学院大学／聖トマス大学／奈良教育大学／桃山学院大学／立命館大学／龍谷大学／ユースビジョン／社会福祉法人大阪ボランティア協会（事務局）

■2010 年度

大阪府立大学／関西大学／京都産業大学／神戸学院大学／神戸常盤大学／聖トマス大学／奈良教育大学／桃山学院大学／立命館大学／龍谷大学／社会福祉法人大阪ボランティア協会（事務局）

■2011 年度

大阪府立大学／関西大学／神戸学院大学／神戸常盤大学／奈良教育大学／桃山学院大学／立命館大学／龍谷大学／社会福祉法人大阪ボランティア協会（事務局）

【2011年度参加大学ボランティアセンター（および同等の機能を持つ機関）の概要】

■大阪府立大学ボランティアセンターV-station(<http://www.osakafu-u.ac.jp/>)

学生によるボランティアセンター設立活動を受け、2009 年 11 月、学生課学生サポートグループ内に設置される。現在、スタッフとして 17 名の学生と 1 名の職員を配し、中百舌鳥キャンパス本部と羽曳野キャンパス支部で連携し運営している。

「1 キャンパスライフ 1 ボランティア」を標語に掲げ、すべての学生がボランティア活動に携わるきっかけを持てるように、そして、社会問題への関心を高め、その問題を解決する主体は自分たち 1 人 1 人だという意識を持てるように、スタッフが働きかける。

2011 年度より、日本財団学生ボランティアセンターの大阪事務所として、学生のボランティア活動を活性化させる事業（PR カンテスト V-1、など）への取り組みを始めている。

■関西大学ボランティアセンター(<http://www.kansai-u.ac.jp/volunteer/>)

2005 年 4 月、本学学生の社会参画活動を支援することにより、学生の自主性と社会性の涵養に資することを目的として開設。「ボランティアセンター職員と共にセンターの運営事業に携わり、学生目線から学生のボランティア参加のきっかけ作りを行う」という理念のもと活動する学生スタッフを置いており、現在学生スタッフは 32 名である。

年 3 回発行の機関誌「Volury」やホームページ等により、学生による社会貢献活動等の情報発信を広く行っており、学外諸機関・団体から大きな期待が寄せられている。

また、ボランティアやコミュニケーションに関する講座、学生スタッフ養成講座等を企画・実

施しており、一般学生のボランティア活動へのきっかけ作り、学生スタッフの育成支援を行っている。

■神戸学院大学ボランティア活動支援室(<http://www.kobegakuin.ac.jp/volunteer/index.html>)

ボランティア活動に熱心な学生、教職員の要請を受けて 2005 年 4 月に設置。学生支援センター（当時、学生部）の管轄のもと、さまざまなフィールドでの学生の社会参加を支援している。有瀬キャンパス（神戸市西区伊川谷町）とポートアイランドキャンパス（神戸市中央区港島）のふたつの支援室が連携して、新入生のガイダンス、夏と春の長期休暇期間のボランティアプログラム、活動情報の提供（掲示、メールサービス、HP 等）、活動助成金制度等を実施している。特に 2011 年は全学を上げての東日本大震災支援活動を展開しており、学生のとりまとめの窓口となっている。運営は、教職員、学生によるボランティア活動支援実行委員会で事業の企画と点検を行う。学生スタッフは両キャンパスで 26 名である。

■神戸常盤ボランティアセンター(<http://www.kobe-tokiwa.jp/volunteer/index.html>)

2009 年に建学の精神である『実学の精神』を実践する新たな場として設立。学校法人玉田学園によって運営されるボランティアセンターとして、神戸常盤大学内に設置され、神戸常盤大学、神戸常盤大学短期大学部、神戸常盤女子高等学校、神戸常盤大学附属ときわ幼稚園といった法人全体のボランティア活動や市民活動の活性化を担っている。また、神戸市長田区社会福祉協議会の運営する長田ボランティアセンターと、設立準備から連携・協働しており、地域に根ざした活動や卒業後の活動への窓口が準備されている。神戸常盤ボランティアセンターは学園・学生・地域を効果的につなぐ役割を果たしている。

現在学生スタッフは 13 名。主な役割は、ボランティアニュースの発行、ボランティアの記録等。また一般の学生や高校生、幼稚園の保護者、地域の方々をボランティアにつなげるための企画・運営などを行っている。

■奈良教育大学ボランティアサポートオフィス(<http://www.nara-edu.ac.jp/>)

2004 年度より近隣の教育委員会と提携を結び学生をスクールサポーターとして派遣。（学生支援課が担当）。2007 年度に採択された「職業意識育成プログラムのリメイク＜メンタルフレンドとしてのケア参画型キャリア教育の展開＞」（現代 GP）を契機に「ボランティア支援総合センター」を設置。教育委員会所管の学校園へのスクールサポーターの派遣の他、社会参画型ボランティア活動への支援を実施。2011 年度学内センター再編により「教育実践開発研究センターボランティアサポートオフィス」として再出発。現在学生スタッフは 15 名。オフィスの運営のほか学生企画の 6 プロジェクトを運営。「あいふた from 奈教（キャップのリサイクル品としてメーカー等をメーカーと共同開発。流通等にも関わる）」等を実施。

■桃山学院大学ボランティアビューロー

(http://www.andrew.ac.jp/campuslife/volunteer/volunteer_katudou/01.html)

開学以来「キリスト教精神に基づく人格の陶冶」と「世界の市民として活躍しうる国際人の養成」を建学の精神とし、つねに行動力のある「世界の市民」の養成につとめてきた。

そのための場と機会を提供するため、2004 年度にキリスト教センターに、ボランティア（以下、V）ビューローを設置。2009 年度は、学院創設 125 周年・大学開設 50 周年記念の一環として、V センターの開設に向けた、V 活動支援室（V ビューロー）が設置された。

2010 年度秋学期から科目として「コミュニティサービスラーニング」、「ボランティアコーディネート論」を開設。2011 年度の東日本大震災の復興支援では、V バスの運行、10 日間を 1 クールとした活動、大阪へ避難する子ども達へのケアなどの活動展開をしている。

■立命館大学サービスラーニングセンター(ボランティアセンター)

(http://www.ritsumeiji.jp/vc/index_j.html)

2004 年 4 月、学生が学びと成長を深めるための教学プログラムを体系化・開発する機関として、また、大学と地域がネットワークを構築する拠点としてボランティアセンターを創設。2008 年より「サービスラーニングセンター」に名称を変更。現在、衣笠キャンパス（京都）、びわこくさつキャンパス（滋賀）にそれぞれ設置されている。

センターでは、「正課」としてサービスラーニング科目の開講、「課外」としてボランティア導入プログラムおよび活動支援・促進に取り組んでいる。また、両キャンパスに「学生コーディネーター(学生スタッフ)」制度を設け、同じ学生の立場と視点から諸活動を支援するピアサポート、ピアエデュケーションにも力を入れている。

■龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター(<http://www.ryukoku.ac.jp/npo/>)

2001 年に建学の精神である『共生』教育の一環として設立。深草・瀬田の両キャンパスにある。年数回のセンター委員会（センター委員は教職員。学生スタッフはオブザーバー参加）と、毎月 1 回のボランティア・NPO 活動センター会議（センター長を含むセンタースタッフと学生スタッフ）で審議された内容に基づき、学生と教職員が協働してセンターを運営している。現在学生スタッフは両キャンパス合わせて 84 名である。学生スタッフの主な役割は、シフトを組んでボランティアをしたい学生の相談対応することや、一般の学生をボランティアにつなげるための企画・運営などを行っている。

■社会福祉法人 大阪ボランティア協会(<http://www.osakavol.org/index.html>)

1965 年、全国に先駆けて誕生した市民活動総合支援センター。「ボランティア・NPO 推進センター」「企業市民活動推進センター」「ボランタリズム研究所」「情報出版事業」の 4 部門を持ち、「自分たちの活動を広め深めていきたい」と願う約 190 人のボランティアスタッフと 20 名の職員が、ボランティア（グループ）や NPO、企業の市民活動を支援している。若者や勤労者など多様な市民がボランティア活動や市民活動を通じて社会に関わる機会をつくり、市民が主体となった社会づくりをめざしている。

【これまでの実績】

2005 年 12 月	「関西の大学ボラセン職員・関係者の情報交換会(仮称)」開催
2006 年～2008 年	「関西地区大学ボランティアセンター担当者会議」開催(全 12 回)
2009 年 4 月	「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」発足
2009 年 6 月	第 1 回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催 【事例検討】(神戸学院大学) テーマ:意思決定への学生の参画について 【情報交換】(奈良教育大学) テーマ:学生主体の事業(学生スタッフ)への関わり方について

2009 年 7 月	第2回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催 【事例検討】(関西大学) テーマ:学生スタッフの自発性を促す～Volury 編集委員への対応～
2009 年 10 月	第3回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催 【事例検討】(立命館大学) テーマ:大学 VC と学生ボランティア団体がともにつくるイベントへの関わり
2009 年 12 月	第4回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催 【事例検討】(神戸学院大学) テーマ:初心者からリーダー層へと成長を促す取り組み
2010 年 2 月	第5回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催 2009 年度の振り返りと次年度に向けて
2010 年 6 月	第6回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催 【事例検討】(桃山学院大学) テーマ:個別相談に来た学生へのフォローアップ
2010 年 7 月	第7回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催 【事例検討】(龍谷大学) テーマ:大学ボランティアセンター主催事業における学生への関わり
2010 年 10 月	第 8 回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催 【事例検討】(神戸常盤大学) テーマ:地域と大学が協働で行う災害ボランティアコーディネーション
2010 年 12 月	第 9 回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催 【意見交換】報告書作成に向けて
2011 年 3 月	第 10 回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催 【座談会】 テーマ(1)学生のボランティア活動における学びと成長について テーマ(2)大学VCにおけるコーディネーターの機能と役割について
2011 年 6 月	第 11 回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催 【事例検討】(奈良教育大学) テーマ:行政、NPO、大学、学生の連携について
2011 年 8 月	第 12 回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催 【事例検討】(京都産業大学) テーマ:障がい学生支援とボランティア活動
2011 年 9 月	第 13 回「関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会」開催 【情報交換】東日本大震災への取り組みについて

関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会

学生のボランティア参加が高まり、各大学にボランティアセンターが設置されはじめた2005年より、関西の大学ボランティアセンターの担当者が集まりネットワークをつくってきた。2009年4月より、新たに規約を定め、大学ボランティアセンターのあり方を検討し、大学ボランティアセンターで働くコーディネーターの専門性向上とセンターの存在価値を高め、認知度向上を目的として、事例検討や情報交換を行っている。

<2011年度参加大学>

大阪府立大学／関西大学／神戸学院大学／神戸常盤大学／奈良教育大学／
桃山学院大学／立命館大学／龍谷大学／社会福祉法人大阪ボランティア協会(事務局)

<2011年度世話人>

井上泰夫（立命館大学）
川口謙造（神戸学院大学）
脇坂博史（桃山学院大学）
白井恭子（社会福祉法人大阪ボランティア協会・事務局）

編集 社会福祉法人 大阪ボランティア協会

(以上、敬称略、大学名・氏名五十音順)

大学ボランティアセンターの役割とは —関西地区大学の事例研究から読み解く—

2011年11月発行

社会福祉法人 大阪ボランティア協会
関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会

〒553-0006 大阪市福島区吉野4-29-20 大阪NPOプラザ100号
TEL 06-6465-8391
FAX 06-6465-8393
Email office@osakavol.org
URL <http://www.osakavol.org/>